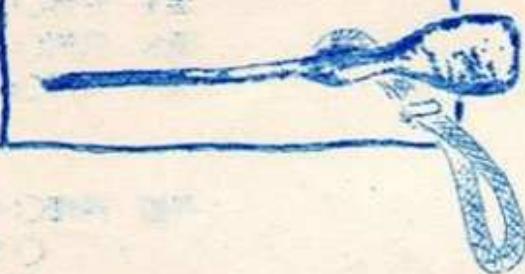


渓 棱



15

溪穀 No. 15



今日は「登山はスポーツなり」という考え方が一般的になつてゐるが、しかし、スポーツとは何かということは、まだよく知られていない。

スポーツならばチームでなければならず、チームならルールがなければならぬなどとさく簡単に割り切つてゐる人が多い。登山が山対人の闘争であることを忘れて、それを人対人の競技のように思い込んでいる人もある。固体の登山部門を山岳競技などと呼ぶバカらしさも、こんなところから生まれているのであろう。

登山にルールなどはない。山と人との間にどんほルールがあるというのであろう。人が一方的にどんなルールをきめたところで、山には通じない。登山といつスポーツの世界で、登山看守律するのは、登山者自身のモラル一途義心だけである。

溪 稼 (No. 15) 目 次

会の運営対策について —ストレートの採用にもふれて—

辻 勝四郎(4)

丹沢の記録

西丹沢 惠 沢	清水 英男(10)
神ノ川流域 工ビラ沢	清水 英男(11)
原次郎沢～流れ沢下流～鈴木ノ沢	清水 英男(12)

△谷川岳の記録

一ノ倉沢 エボシ岩南稜	奥園 美輝(14)
2ルンゼBルンゼ	(15)
南面 フサカタ	(15)
ヒッコーキ	(16)
東雲沢 白毛口沢	清水 英男(16)
一ノ倉沢 中央稜	牧野 雅雄(23)

甲斐駒ヶ岳 黄連谷右俣登攀

奥園 美輝(7)

春の後立山 虹岳槍ヶ岳 —赤岩尾根—

奥園 美輝(20)

八ヶ岳各期合宿

阿蘇陀岳 —硫黄岳縦走	本沢 道彦(24)
阿蘇岳北稜	清水 英男(25)
赤岳西壁主稜	奥園 美輝(25)
ショーゴ沢	佐々木武夫(27)
裏同バルンゼ	牧野 雅雄(28)

或る敗退 —穂高屏风岩中央カソテ—

辻 勝四郎(29)

八ヶ岳隨想

八ヶ岳あれこれ

山県 昌彦(13)

吹雪の中のツアーハイマツ(28)

宮電渓谷 奥園美輝(31)

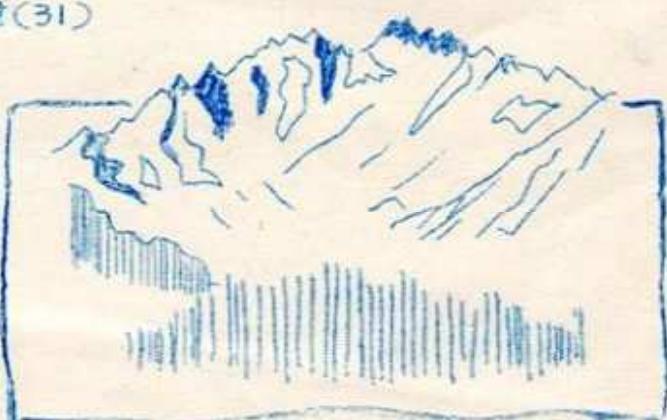
巻頭言 辻勝四郎(3)

会務報告 (32)

会則 (33)

会員名簿 (34)

編集後記 (35)





山に思う心

今年も正月早々の昭和山岳会の遭難をはじめとして、山の悲劇が相次いで、多くの若い尊い命が失なわれている。山を登る一人として非常に残念に思う。

登山というスポーツは、その性質上これを他のスポーツと同一規範で論することは勿論できない。登山とは、もつとも人間的なスポーツであり、それは自然に対するささやかな人間存在の誇示でもある。

都會の巨大なメガニズムの中で、否応なく自己を埋没してしまっている現代にあつては、登山は時には危険であるかも知れない。だが、その行為の中でわれわれは悲愴のうちに見失なつていた自己の主体性を復活させる。自分の都會しか見えない奇妙な個人主義がはびこつてゐる今日の社會にあつては、それはほかに比較すべくもない結果のわからぬことへの懲憤の行為であり、この行為の中に文芸や美術と同様に、一つのものを心の中に創造するという系みをもつ。

だが、その一方では、飛躍的な技術や登山技術によつて生み出されたアルペニズムの隆盛の中で、登るためには手段をえらばない豪慢不遜な登山者が生まれて来てしまつたろうか。

登山が眞に人間的な行為であるがためにも、われわれは自然に対する畏敬を忘れてはならない。

辻 勝四郎

カット=上田吉義「日かけの山、日なたの山」より借用

会の遭難対策について

——スレーブの使用にむかれて——

(四三) 过勝四郎



蒲江溪及山岳之圖雖已未至但

1. 会計の進行(会員に)に優先とする。

2. 正会員は自かう山行を企画することができる。たゞし「岩登り」「次登り」「冬山」及び「三日以上にわたる撮影」については、あつかじの一定期間の暫定的に三、四ヶ月の山行計画を所定の用紙に記載し没頭で提出して承認を求めるければ

的には何等おこなわれていなかつた。だが昭和2年にはが制定して以来、各会員の自覚により飛躍した傾向を現うなかつたという計画実行の堅実さを語うよりも、過去において貢献を名りて謹顕問題を起さなかつたという裏に、われわれとしても謹虚に焼津を考えてよいふつである。諸般の筋勢から、会としても独自の、そして最近張り立つる薙頭予防方策を講じる段

間に来て、いろいろして、役員会に立ち
いて検討し、六月二三日の集会に
おいて提示され決定したのが、以
下の道難打策要領とそれに伴なう
スレードの採用である。

二、山行の失意

- 1、山口計画が承認されて実施に移される場合、会員は出発前に必ず本部に電話連絡を行ない、帰着後も必ずやかに同様連絡報告を行う義務をもつ。

(2) 由出ロの登山者の方、由山
ルートには必ず記載しなけれ
ばならない。

三、遭難発生時の隊員運営

1、標高予定日の直前より直手に
至るも、何等の連絡を待つればい
まじめに、行方不明の命令を出す
ことなし、近勢の判断により対策
手筋を設置する。

2、遭難発生と同時にその救助
態勢に入るが、而云速要請の場合は
は、その指揮下に従うものとする。
3、必要は、全員遭難救助に出
勤する義務をもつ。

4、探索及び救助に従事する旅費
、宿泊費等は、全会員の負担とする。

5、遭難に際して争った費用は
原則として(4)に準した費用をもので
き、本人家族の負担とする。

第四回 フレードの使用

△フレード採用の意義

アルピニスムの科学的体系化を
目的として、又遭難防止刀剣として
の創始的な効用をも期待できる
ものとして、岩場の寧殺はけ一
いわゆるフレードーの頃が、

我が國においても最近かなり積極
的に行われて来ている。現状では
まだ過渡期にあり、客觀的な基準
による科学的に整備されにフレー
ドを切つまでに至つてこないよう
だが、その取り組みと現在までの
成績についてや次方評価されて良
いだろう。

岩本透西、遭難、一谷川岳の記
録の一節が、その主旨に反して
遭難を説明した一例に見るよくな
れは、ルートフレーティングを更
方策として選択するなど
には、東かセモ——ひいては遭難
救助長につながる——という記録が
新の対象としてのみ利用される
いう危険性をもつわので、その利
用に当つては、いわゆる冒険家印
效能を元介考慮して行われるべき
である。

今にあけるフレードの採用に當
しては、

つとも内訳での不満點が私わ
れはければならないが、それは單
なる山行の規制ではなく、フレー
ドの一義であるアルピニスムの
体系的方向づけ(システムマッチ
ク・トレーニングの基礎)に立つ

て、その中で遭難予防を消化して
行なうとするものである。

一つの組織として、山行にフレー
ドを適用させる場合には、一定
の基準をもつた広汎な岩場を網羅
統一したものが必要になるが、そ
二までの結果を得られない現状で
は、各山種別のフレードに依つて
判断しなければならない。

今としては、山行程度の高い谷
川岳のフレードを行にとり上げ
その也については同様基準に立つ
て計画書提出の時に適宜検討する
ことになる。

△フレードの適用

誰でも始めから一流のフライマ
ーや山のペチランになれるわけで
はない。そこには、長い地味な修
業の時期がある。その修業をおろ
そかにして、華やかな結果を求め
ようとするときには、そこには危
険があるばかりか、スポーツとし
ての登山の楽しみも得られない。
そしてまた、いくら準備しても、

山行計画表

記載例

No	氏名	予定期日 又は日数	ルート	主張の頃鳥	構成	役員会決定	備考
8/15	一ノ倉 南枝	4ルンセ 5ルンヒ	パ-テイ		4ルンゼートツ		
2/5 (又は2月半)	八ヶ岳小同ルルル	飛雪期2回	単独				

初級	中級	上級			
A	B	C	D	E	F
マガ沢二ノ沢	マガ沢三ノ沢左	ニルゼビ・ルート	ニノ沢石俣	中央稜	幽沢中央ルート
マガ沢三ノ沢右	タカノス沢B-C沢	五ルンゼビ	北稜	六ルンゼビ左俣	・左スース
四ノ沢	川棚沢	四ルンゼビ	中央壁	滝沢下部～Bルート	コップ状正面
六ノ沢	タカノスA沢	角 稜	幽ノ沢一ルンゼビ	幽沢中央壁Bルート	滝沢スラブ
ヒツゴー沢	マガ沢東南稜	ニルゼビADルート	・V字ルート	コップ状ルンゼビ	衝立岩正面
マガ沢本谷	マガ沢シ北左	二ノ沢左俣	三ルンゼビ	エホシ沢奥壁	
残雪期一ノ沢	オデガ沢	幕岩Bルート	幽ノ沢石俣	霜岩A-Bフェース	
			二ノ沢本谷		
			残雪期一ノ沢		
			アルファルンゼビ		
			幽ノ沢滝沢		
			・二・三ルンゼビ		
			積雪期一ノ沢		

倉田角ルート等級表の説明

- ▷ フレードの作成に当りては、各種資料、記述等に於ける豈琴全駿を勘案した。
 - ▷ ルートは各級とも上から下へと難易の序列を立てた。(下へいくほど難かしくなる)
 - ▷ 黒白駒のフレードであるが、二ノ宮二ノ沢はその利用度から時に入れてみた。

A = 岩倉川の基礎をマスターして（春田沢至善）

第二回 基礎技術の応用（西田辰司著）

（三）遺傳工程技術在分子水平上

D = C のルートをトップで充分こなしてから

E = 口のルートに過熱した

ハイキングでもないか、ヨーロッパーセントの安全性はない、というのがスポーツとしての登山である。

スポーツである以上、登山にモード記録」は大切である。だが、それだけが登山の目的ではない。安全にはまつたグレードの適用には、記録を競うという邪道に走る傾向を生じかねない。そして一方では、アルピニズムの本質であるアドバンチャーレの香氣を失わせるという危惧もある。会におけるグレードの採用とその運営には、今後多くの課題が残されていると言つてしまふだろう。

むすびに

興味性にとほしい古たらすの記述に終つたが、これは未だ会の運営方策の序論にしかすぎない。今後の問題を登山界の動向のうちに汲みとりながら、遠方委員会を中心に会の実状に合った体制を、我々は早速に確立しなければならぬ。

甲斐駒「黄蓮谷右俣」登攀

奥園義輝



まだ凌晨、中を様子にむかってタクシーをとぼす。車の前方には頂を赤く染めた朝ヶ岳がてびえ、その内側赤く車をのり入れる。朝ヶ岳神社で車を捨て、五合目めにして無事根を登る。庄の平、又渡りも状況にとほして、まだ正午にも向が遠い九時十五分五合目小屋に着く。ひと休みしたのち本谷に下る。途中木筋からは径が非常に荒れており、古い鉢自やケルンを通りに下る。途中いくつか径を失ないながらも右小屋に着く。二つの右小屋は互承なもので、十人は柴に入れる。

右小屋より十分程で千丈の滝を巻く道に出合つ。そのまま右岸につかれた細い踏跡に従つて登る。千丈の滝上に出た。そこで一旦休んで、いよいよ右岸に移る。しづくに西のスラブをいくと、

ハ木手との滝に出会う。庄洋より農で径がついているので、それに従つて滝上に出る。滝に大きな岩が散乱していて、その向を進つて進むと巨大的な坊主の滝にまづかつた。逆瀧のオーバーハングしたシの滝はすぐ、まじい迫力がある。滝の少し手前に坊主岩側から入るアレ穴を登り左側へマフ尾根を越して懸垂で落口へ下る。これより雪渓が現われる。雪渓は薄くて暗でうなぎの左岸のスラブをいく。途中ぬれたところがあり少々苦労する。スラブは悪いので雪渓にうつる。すぐ十五メートルの滝である。すぐに十五メートルの滝である。右側より長い草付の壁を登りて雪渓が続く。

右岸は右へ九十度近く折れて滝上にかかる。この上からは二俣まで出石に滝をかけている。二俣は右側のスラブを登るわけであるが、今の位置から滝心に入るところができないため、左側のスラブの草付を登り二人ほど立てる。

ラスまで登る。二俣には恰好の木がなん本もあり、それをヒソノにして懸垂で滝心へ下る。水量は意外と少なくその位置でアンサインして水際を立てる。四十メートル一ピッチで中段テラスに上る。これがドリップ層のスラブはいつも傾斜がひどくなり、節分的には六十度にも近いと思われる所もある。ホールドはすべてアンターホールドでフラジが滑り、体が岩よりはかれそうになる。途中古いハーケンが打ち残してあり、それをホールドにして登る。四十メートルいっぽいといつ所で確保するにセミツ道具はサックの中に入れ、まん十丈の滝まで二十度前後の傾斜で雪渓がつく。キックステップで滝下までいく。最下段ナムニ一滝と思われる滝は、あらかた雪の下で上部五メートルほどが出ている。こゝも雪渓と岩との向がはなれ

ており、四十メートルほど手前より右岸のスラブに食い込むクラックを登る。左岸は坊主岩の左側的で上部五メートルほど手前より左岸のスラブでとても手を出す気にはならない。五十メートルほど浮石の多い水の流れるクラックを登り草付バンドを下り気味にトラバースする。ナムニ一滝から奥千丈の滝のスラブを登るわけであるが、

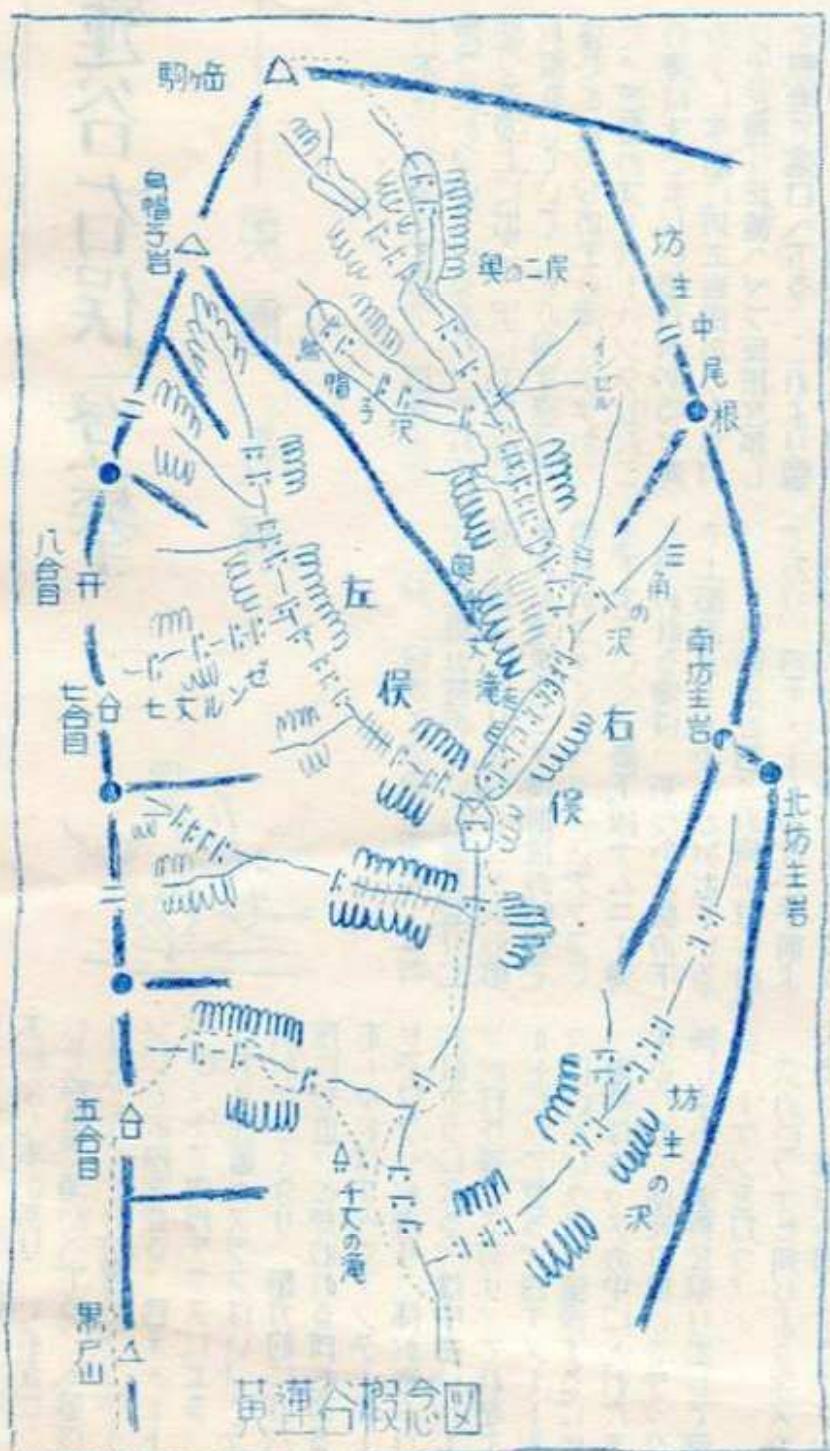
今的位置から滝心に入るところができないため、左側のスラブの草付アントーホールドを利用して登るが、このヒッヂを登ると、こしもの奥千丈の滝も終りに近い。ひと休みして食事をとる。まさに冷汗三斗

の東、メロードの滝を登る時」とないつのだろう。(一)でワラシをまた靴に履き、木道を右側に渡り、ラックを十メートルほど登る。(二)から正面の滝を左側より突破しようとこうみたが、ねれたスロープの上に石が生えた五メートルほど登りが疎間に悪く、あきらめてハーケン二本打って垂直でクラックを降り、今度は口のステップを登る。水の流れるラックを十メートルほど登り、幸付クラックに移つて二本のハーケンを打つて四十メートル、いはば、登る。それより車付のバンドを伝わつて雪美に移る。サイル四十メートルをじつぱいで雪の中にピッケルを差し込んで確保する。

山の下の露石帯が実はインビルで、これが判つなかつたばかりに上部でのシメを向違つてしまつたのである。)漂流帯と想入するあたりも勢力下で、たゞ軍艦を島上登行である。アイゼンがあれはもつと早く乗れたのであるが、いかんせん南アでまだこんなに雪が残つてゐるとは考えて、いかつたため

持参しなかつたのである。
二俣に着く。(こゝをでの時は
インビルの末裔だと思つた。)右
かわも大きな出来が出来つてゐる。
左の方は七・ハメートルほどのス
ラブ連ぶ出合つていて、その方に
入る。道上に出てからあたりを観
察するが、どうもほつきりせず右
の方を本谷と考へ、小さな草付の

屋根を忍びる。途中古小屋を見付け、今日はこそじハーフとする。時間的にはまだ早いが、夜行バスはそれと、まだこれから先どうなつてゐるか時間的にも地理的にも自信が持てなかつたからである。



ーを食べているのか、まるでその
ものを食わされた。

雨でも降るのか雲が低い。岩小室の天井にハーケンを打ってツェルトを張る。エアーマットがひつため横にするが、あまり寝心地が良くなかった。遠く町の灯がナラカして、またたく度等が人里をはなれた山の中に居るのだといふことを痛感する。夜中、手と足が冷たく何度も目をさます。ツェルトの内側にも水滴がヒツラリついていて、頬がふれるたびにツと目がさめる。

三時半、ツェルトを出る。昨夜とは打って表つて満天の星空である。気温はクツと低く、パツキンクする間かククふるえる。ハケ山、秩父の山が黒いシャルエントとなつて浮び、少しپつ東の空が赤味を増してくる。完全に身仕舞終える頃、日が昇つた。朝食はラーメン三個である。それにソーセージをアツ切りにして煮たりコツフェル一杯になつた。それを二人で食た、いづげて出発。

昨日偵察しておいた石の沢に入り。雪は氷化していく、ヒツケルで刀ツテンアレながつ登る。ゴルジュとまつたところに十メートル



國人の一ノ役附近

コレス・タイム
駒ヶ岳神社 4・50-1 五合目 9・15
レチ太の滝上 10・15-2 保 11・15-1
イソヒル 15・50-1 若小屋 17・15
岩小屋 5・05-1 マスクを戴いた石ル
ンゼに 13・6・30-1 穂録 8・10-1
頂上 8・35-1 横手 13・50

せる。すぐ原上に登り、朝の間食をとり、記念の写真を撮る。

ほど良くなかった。ロブリアンが
イレンして取り付く。非常にやろ
く、その上に荷物を積みつけて、しる
ので告げする。じつたんテラスに
上り、今度はソル／＼のスラブを渡
き、わざかな手掛りを利用して、二
本のハーベンを打ち登りきる。二
段上からは急峻な雪渓が続く。
すべてピツナルでステップをきさ
んで登る。なかなか力づなには
まつたく疲れ。腕が抜けてしま
ってクである。一時間豆つても終
らない。とう／＼葉を看やして左
のマツ尾根に入る。(一)の尾根を越
して左の方を覗くと、もうと大き
な渓谷上部に突き上げているのが
わから、現在登つてしるのが支沢
だといつことがほつきりした。
途中つくに下れる所を探して左の
沢に下る。この沢も雪がつまつて
おり、少しはかり登るとまた二俣
になつていて左の沢に入る。(二)
もひどい傾斜である。ステップを
切りながら登るとまるで崖が切
れたようにこの沢も終つている。
じつたん荷をおろして右手の尾根
に上つて上部を見る。大きな沢が
見える。(一)の尾根は浅く一部が切
れていて上部の天と合さつている
ため、多分下でわかれ、右手の天

に階層されにものと田べう、すくに

丹沢の記録



西丹沢惡沢

清水英男

(版印) 39·4·二〇一九

本居宣長 反對論 清木英

音とはじえ、駅構内のベンチは

かつた。前区木から零雨が降り

の花田歌かうバスで一時間

中川宗義曰
「此句是
又將別表置
御殿在御殿」

東天出合は、中川川本流沿いの

自動車道路と鹿歩記踏へ行く途中、水に下る時は猛烈な渦アツミをもつた所で落水をする。道が大きく曲りきつた所に前に大田端が掛つてゐる所で、入口には拍道桿がある。

沢に入るとF-1で、走行バーで、三名が取り付いていて、それをひとつソフを六八度して直立を試みて、いよいよ乗さず丘に大きく庵いた。

正面を見た深井バーティはがせん意気があがり、アンカイレンして石ドカラ取り付け、中央落下桌へすり、水際を横車に登り中程から右の乾いた権奥をスタンスのある右側に斜めにトラバース。こゝから上部はホールドが豊富にあり落口へ一気に飛越した。

沢に降りたところはF-3の上部であつた。こゝまで一時弱か、り天気もわるいのでベースを上げることにした。丘からカレ沢を入れるとF-4が垂直の壁を兎事に落している。この直壁は全の上左側を回り込み左下かつ取り付くが、中段の直木よりの所までいくのに若干滑れてくると、ソフは頭からシマワードを浴びたが無事壁りきつた。直木の名のとおり長い滝が数多くかかるつていて、中で、スラブ状のナメ渓F-5は美しい滝であった。F-5をすず左より刀レ沢が合流すると

のにおくれ氣味である。夫が石に曲る正面に而て棚が立てて居る現わし、早速写真をとり小休止とする。(一)の大廟は二段に分れ下段は垂直気味であり、左側枝大より取付き、中段の落口へ斜めに登るが、乘越す時ホールドが木にねれて悪く緊張した。なお、下段はラヤワーを浴びれば、中央奥のビードロに階段状のホールド、スタンスがあり面白いと思う。

塘堤を越え、両岸の狭くなつた暗い谷じの所に無沢最悪のF2があらわれる。この滝はまだ数回しか監査されておらず、われくも滝下でルートを研究し、やるか高地區へかかる。しはうく協議し合つて結果、全身からシマフーを浴びても良い豪湯に入浴してその脚やううどの一にて、滝下から少しへり石側の急なガレ状の滑道に入る。この滑道はちよつとした石造で、高度感もあり、けつこう辛しのたので、中段ぐらいから次に下る巻き道を、練習といふことで最上部までサイルを行けて登る。おかげで、下る時は猛烈な力でこぎきる

二の上にF₆がか、つてある。中段にバンドが走り一段に落ちて、上部がハンク氣味でわるく、先行パティのK山岳会の連中ろくなアスミ使用で素直そうとしたが、ハーテンが抜けトツフは見事に満ツボに落ちて委脚はずれの水遊びをしてしまった。われくも試みてみたが岩がもうく、K山岳会の二の舞は演じにくおかつたので、右の灌木を憚りに逃す。

次はや、広くなり一候となるが左に入るとナメ渕が連續的に現われ、フランジをはいたM、エヌ二名は快速に越して行くが、ひと度は亂立少しで戻る。まことに感して

のほんじは、ナメ鹿にぶつかり
バランス良く越すと岩床丸帯となり、こゝから左側に付いた踏跡を
たよりにマスクを開始する。森
雨にねれ、シャワーを浴びて冷た
くなつた体をバスの待つ中川温泉
へ。

(コースタイム)	
新松田発	5.50
中川温泉	6.55
寒沢出合	7.40
大棚	10.50
通行終了	11.35
中川温泉	12.40


 (注) 梶本駅でこの付近のバス路線
に不慣れなため西雨の中を2時間
も時回をつぶし、タクシードラムにとさされ
た。バスの音ス和にバスにゆり
れて着く。音ス和部落を通り抜け
る時、美しいな字王に導師を教え
られ神ノ川林道へ出る。林道は幅
広い立派なもので、右下に道志川
河谷はんである、左方、こゝで
はほとんどシャワーを浴びるど
はなし。

要次F2は、昭和34年に江、村田の
パートナーが一時間余を要して登
つていて、ルートは右手あやか
ふり気味のクラックを登るもので、
ハーケンは勿かず、思い切った
腕力はんである、左方、こゝで
はほとんどシャワーを浴びるど
はなし。

F2は、昭和34年に江、村田の
パートナーが一時間余を要して登
つていて、ルートは右手あやか
ふり気味のクラックを登るもので、
ハーケンは勿かず、思い切った
腕力はんである、左方、こゝで
はほとんどシャワーを浴びるど
はなし。

F2は、昭和34年に江、村田の
パートナーが一時間余を要して登
つていて、ルートは右手あやか
ふり気味のクラックを登るもので、
ハーケンは勿かず、思い切った
腕力はんである、左方、こゝで
はほとんどシャワーを浴びるど
はなし。

(期日) 39.5.30~31
(メンバー) 清水 外二名

(神ノ川流域) 工ビラ沢

素泊り150円で一階の広々と
したドミニオンを間違ひながら入
る。

四時三〇分起床、山はから昨日
きの木道をエビラ沢出合まで下る
。コンクリートの壁は高がかつて
いるこの沢は、出合にストレ

ートに落ちる15メートルの滝をか
けるが、この滝は大きさは滝ツボが
あるので、壁に取り付け直登不
可能である。滝を見ながら朝食を
すませる。左側からのカレに入り
炭焼道に出てF1、F2を高地いたが
本流に降りる場所がわからずもた
つてしまふ。F3を簡単に右から
越すと、沢筋は今までとは段つて
明るくなり平原にある。二、三の
小滝を越えると源下点となり、釜
を持った達を越え左に曲つたところに、小滝を前にして立派な二つ
の堰堤が木勢河内に落ちていて。
伐採された石かつて越え堰堤の上に
出る。ここで小休止。退避を境に
下からの炭焼径が明瞭についてい
た。右側にトタン屋根の建つ付近
から又廊下伏となり、釜をもつら
メートルほど滝がある。右手は
釜があつて駄目。左手のハンクし
た壁の下のハンドをアンサイン
してはいるようにして通る。こ

の壁には残置ハーベンがあり、岩
松が上部に生えていた。次いで滝
ツボを跨つた10メートルの滝があ
つたが、次一ぱいの金のため取り
付けた石にまく。小滝を跳び左へ
曲つていくと倒木をかけた5メー
トルの滝があり、丘側に出ると炭
焼道と出合う。(こゝで山師の人達
に上部で伐林が夜)なわれている
のを注意するふつゝわれる。山師
達と別れるとすぐオ一の大滝が下
段らメートルの滝を越したがえ20メー
トル垂直に落下していった。下段
左壁に取り付けたかわるく、積房
と二つとなり、平凡となる。左側
に山師達の飯場小屋があり左に町
の小屋がある。小滝を越し8メートルのネジ
レの滝が右から左下に斜めに落ちて
いる。これを横断すると、右から枝沢
が入つていた。やがて丘から急な
カレ沢が落ち込む場所にオニの大
滝が見事に落ちこんでいた。石の
茎下節はねれているがホールド、大
滝が見事に落ちこんでいた。石の
スタンスが豊富であり(こゝから取
り付いたが中段がわるく、右手の
車付に入り手掛りを擦し木のなみ
ら上部落口石に登り切つた。アン
サイレンしたまゝゼロのネジの

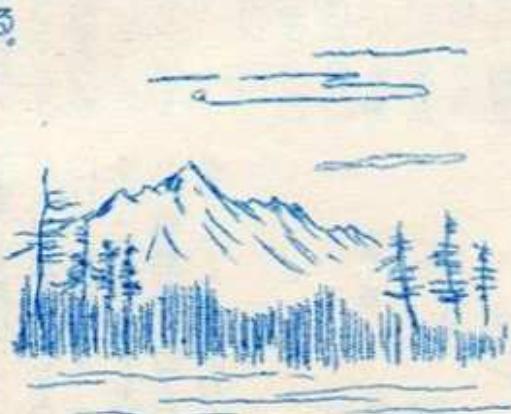
昭和二十七年夏。山海線は進行中の車から飛び降りて用を足してから又来れる程、まだのどかであつた。人気（ひとけ）のなかつた「美しい森」附近も今はどうなつたか。

県界尾根から、その奥は可憐な高校生だった山崎君達を連れて赤岳へ登り、出来たばかりの頂上小屋に荷物を置いて阿弥陀岳を往復したのだが、途中で腰がへつて阿弥陀の地蔵さんの方に落着いていた。リンゴの皮やキユーリの尻っぽを噛み、最後の赤岳の登りではどうとう動けなくなつて、「お前達、朝を持って来い」と、一人夕焼けの空を眺めて岩の上に寝転がつてゐたものだ。

三十年十二月の初旬。松原湖から東洋湖までの道は長かつた。翌日はみされ、横岳の岩の冷たかつたこと、ようやく石室に着いて腰にまぶれると、思つて中に入つたら、氷が張つた地面がむき出しのガランドウにガシカリ、下着までびしょりになつて震えながら東洋湖の根を清里木で駆け下つた。

ハケ岳あれこれ 彦昌県山

ハケ岳隨想



る。

まほたくは
信濃の町か甲斐の灯か
凍つく室と 我共にあり

冬のハケ岳 越えて波の湯
のどかなり

三十五年の夏は、高校山岳部の合宿で行者小屋のわきにベースを置いたが、津田の温泉には参った。

二十二年十一月。やはり一人で白石小屋から赤岳・硫黄・天狗と飛走、黒百合平から滝の湯へと下

連中と入れかわりに入山した後、方に移つて元日だけ西へに走られたが、帰つてから鉄して見たハミリの、大同山・小同山のアーベントロートは、本当にみんなに美しいんだうか。それよりも、連日の悪天候で掃除もさす汚れきつた天幕の中で、誰やうか美濃戸で分けちもりつて来たといく白糸を、こびりついた雪や氷と一緒に食つた美味しさは忘れられない。その後、冬の北ハケ岳にも入つたが、南ハックの雪を堆つた岩机とは対象的に北ハックの良さは、カラマツの枝から者もなく散り落ちる雪の回憶にあると言えよう。天幕の口から眼く私の方を見ながら、豪華なにくず物を両手で抱えて呴つていたリスの姿も印象的であった。

今冬も若い人達と一緒に南ハックに入ったが、湯立つた大鍋の湯を浴びて定に火傷をする仕事。これがハックに入るとすれば、私はどんな登り方をすれば良いだろうか。いずれにせよ、少し強めにして山になつてしまつたようである。

谷川岳の記録



出でて夜が明けるのを待つ間、朝飯を食つ。隣の枝線に切るのを見届けてすぐ出発。前までは七月に来て時よりひどく秋つていて水も少くない。中央線テールリソナを全てエボシ天井壁の車両をトラバースして南限アラスに着く。距離からは新潟地蔵以来、落石がひどく時折壊すとい面を立て、本谷の西端目がけて大小の石へ落つて行く。すぐ開幕して、樂園、鳥打、清水のオーテーで取り付く。ナムニードのテラスまでにはサイン

未だ「朝」へ行つた時の彼れが、残つていて体がうまく育つことに気がつかないが、とせかく出羽州で御城をつくった。西ノ門の外に田原町にして、田はかつや山口へ入つて、いよいよ三野原川でのみ。

一ノ倉沢・工ホシ岩南稜	
一ノ倉沢・	日ルンセ
南面・	オジカ沢
南面・	ヒッゴー沢
東黒沢・	白毛門沢

工ホシ岩南稟

興國縣志

明 日
9.6.2
メンバーセンターハイツ 湘南・清水貞助
銀座劇場



ルなしのフリークライミング。部分的に悪い所があるが岩は堅く快適、ナムニーからはアンサイレンして取り付く。入口が悪くちよつと苦戦。ナムニー上はフェースで右より奥壁側へバンド状を登り途中で取り返して丘上ヘリツゲを登る。登り切ると車行きの迷道計でコンティニアスでハルンセ側へトラバース感味に登る。南斜とハルンセのルートはここですぐ立くなり、ハルンセ側を登る。ハルンセに入り込むことをしよう。すぐリップを食る。ハルンセ側を登るが二〇メートル程立つたところ奥壁割に出て三〇メートル程のフェースに取りかかる。このフ

エースは奥壁とストライプを合せすごく高难度が出来。これを登り下る。リツヂ沿いに十五メートル程草付を登りナムニーの下に達する。ナムニーは下が抜けでいてちよつと氣味がわるい。ハーネンが連打してありここでその内の一本を使用。こゝを登り切るとテラスになつてありこゝでまたハルンセルートと合さる。南斜ルートは普通ここでハルンセ側に入つて登る。そしたら外僕等は南斜最後の壁である二〇メートル程の悪相のフエースに取り付く。途中ハーネン無数に打うち残されており、その中の適当なものをだけ選んで使用する。最後にふり気味になつた乘越りと、下から

きわめて悪くトランクの運行アブ
ミは使用して乗りきる。

まだ時間が早いので四ルンセで
モ下降しそうと思ったが、バカに
体がだらりのと落石が多いので気
味がわるくなり、今日はこのまゝ
下ることにして、一人倉田より立
倉へ下り、旧道を走て土合駅へ。
途中二時間ほどト力ケをしたのは
オマケである。

一ノ倉沢

ワツテル越えBルンセ

奥園 義輝

朝日
メンバー
9・6・6
奥園単独

すつかり明るくなつた土合を後
に一ノ倉へ急ぐ。今日もマナガ沢
ラスは自分の番を待つ人でいつば
いである。中央棧取り付近で
木田技術山岳部の丁さんと会い、
三〇分ほど無駄話をしてわかる
。衝立岩の正面、タイレクトカン
テ、滝沢リツチ、滝沢下部タイレ
クトルート等、この次オーナーの壁

に各パークが取り付けていて、
時おりの涼風を楽しんでいる。

エホシロの下は急いで通過する
。豪雪テムニー、中央カンテと二
三パーセイ取り付けられて窓口の
危険があるからだ。本谷バンドは
車は付けていたが、となく一ル
ンセに入る。

二・三先行パークがいてよく
待される。天気が思わしくないの
で、早く棧橋に出たいと思うのだが
がなかなかやさしい。サツテ
ルまでは快適で立り。天気は案に
相違して力アリと晴れ上り、雲ひ
どつよい上天気とあつた。サツテ
ルで小休止をした後、広河原へ下
りすぐに上部のルンセに入る。

Aルンセは河東駆くまで雪渓
を残してありクレバスが至るところに大きな口を開けている。雪渓
通りにBルンセ出合点では行けな
いので右側の草付をトラバースし
てBルンセに入る。ルンセという
ふり立じ溝とちや苦つた方がビツ
タリするような所である。マツタ
ーホルンの右側を通り抜け、上部
で草付とあつた處で道筋に切りあ
り右側の小さな尾根に取り付ける。
往復をわけて登ると散歩路に飛び出
した。オキの耳で鳴鳥を囁り、水

上空14時30分の電車に向に合った
め、急いで天神尾根を下る。谷川
温泉に着いてみると時間があ
るので、湯に入つてゆっくりバス
で水上に出る。

コースタイム	5.52
旧道出合	5.52
中央鞍基部	6.30~7.00
サンカル	9.00
鞍線	10.05
木見月	10.15
谷川温泉	13.05

オダカ沢

奥園 義輝

朝日
メンバー
9・9・1
黒田聰次・奥園義輝

二二三日未の大雨でやのす
ごく列車が遅れていた。高崎まで
はやく一ノ倉へいわれる程の超
渋渕である。水上に着くとやつほ
り切せきがして、こんな日に決に
入るのは我々だけかと思つていた
う、どうでもよいしょく安だする。
今回は谷川温泉までマコつくこ
とをくちいた。しかし相当増水し
ていて、大きめの川が流れ、水
ながら二俣に入る。

どうにか前に立つたといつわけ
でピッタを上ける。石をへつゝた
リ左を高塗いたり、変なところで
フリコをやつたり、馬鹿みたいな
ことをしなかりどうにか一段ネジ
レの滝まで進む。二段ネジレは右
の方から取り付く。階段状でさわ
めで快適。大滝は物すごい水量で
勢いよく滝ツボに注ぎ込んでいる
。しばしボタンとして見られる。
先行パークが左の方から取り付
いている。もっと水際に寄つた方
がらくかも知れないと思い、我々
はまず左の方から取り付いて石の
方へ水流際へと登る。この左から
の取り付ではすこぶる悪く、ピア
ラムではめぶあつかしい。たつた
一足のフライは黒田君にあけたか
ら、すつと靴のまゝである。途中
で確保用のハーネンを打つて黒田
君を迎える。そこから一旦右の方
へ下り気味にトラバースして、一
気に直上する。このあたり標高の
屏風岩オールンセの岩に似て、ま
ことに快適。途中でサイルがいつ
ぱいとなり、又、確保用のハーネ
ンを打つて黒田君をむかえる。残
り10メートルほどで岩壁が破
ムニ一滝があり、それは左岸の壁

をへつるようにして乗起す。二軒

で一の沢は終りである。二保まで
は一段落、二保かつ左に入る。こ
のあたり東若谷丘からあいかふ
であるように迫つて嫌な気分である
。五保は途中、小豆庄溝がいくつ
があるが向越ない。い、加減を貰
て小豆庄溝に入り、あとに草付
をどんどん登り稜線に出る。

天気はあまりバシとせず、私後
側から濃いガスを吹き上げてくる
。また前のほうに雨にでも見渡わ
れたら構だといふことで、中口一
尾根をスッ飛して谷川温泉下トリ
、タクシーで水上へ。

コースタイム	3.20	4.00	5.33	8.10	9.40	13.07	16.45
木上 温泉							
二保 温泉							
水上 温泉							
稜線							
谷川温泉							

ヒツゴーツ

奥園 義輝

期日 35.8.4
メンバー 小泉亮介・奥園義輝
他一名

千葉で一杯オレで、また次の入
口で一杯み、酒を食つたのちやつ
と重い腰をあけの。F-Tはサイル
を取り出してハンサインする。
どうとじつともやない、コンティ
ニアスの運転はとどくものさば
くらせる。途中でいくつかかわ
いて、いつもむさづむさづかずに
苗戦していくのを見かねて、こゝ
でとほかりナイト精神を發揮して
ひうぱり上げてみる。

天候も手標どことつて、うから
か、悪天とこの辺に入つてしまふ
トライが多い。いくつかの道を登
つたとこで、サイルさん小田原
だ、とじくわけて各自見つくるの
所を登る。坂道に出る前の草口を
皆バテてしまい、車の足場をコロ
ンとねじろんで寝てしまつた。

ハツヤ田からめたら、あたりに

朝食を早々とすませ、Nさんの
来るのをテントで待つ。今日も大
きは良く、Nさんが来れば一人危
い場所に出る。のどかにウタイン
水鳴き・ソンシ・コスシの花が咲
くこの日本は。トカゲの聲がき
感じてロードサイドである。ほんわか
にステップをつくりながら登行し
丘手に枝沢を興送ると、二〇メー
トルの滝が姿を見せ、その上部に
大滝が水流豊かに見事に落ちてい
る。土台頃までさき出す、こゝで
上野が最終で降りて来る人達を最
後まで見送り、二人で白毛門沢に
入りことにきめる。

昨日千石ハナケの渓まで入つて

西面はまだ入ったことない者
ばかりとて、駅に着いたはいが
谷川温泉へ行く道がわからぬ。
石在丘往したあくま一軒の大屋は
本アルに入つて聞いて、やうと判
るといつ仕事である。谷川温泉の
「みやげ物産」の移り明るくね
ばれ、三八腕を行き立てる
おうわんを購入。

千荀で一杯オレで、また次の入
口で一杯み、酒を食つたのちやつ
と重い腰をあけの。F-Tはサイル
を取り出してハンサインする。
どうとじつともやない、コンティ
ニアスの運転はとどくものさば
くらせる。途中でいくつかかわ
いて、いつもむさづむさづかずに
苗戦していくのを見かねて、こゝ
でとほかりナイト精神を發揮して
ひうぱり上げてみる。

天候も手標どことつて、うから
か、悪天とこの辺に入つてしまふ
トライが多い。いくつかの道を登
つたとこで、サイルさん小田原
だ、とじくわけて各自見つくるの
所を登る。坂道に出る前の草口を
皆バテてしまい、車の足場をコロ
ンとねじろんで寝てしまつた。

ハツヤ田からめたら、あたりに

コースタイム	3.05	4.00~5.00	6.10~7.00	12.55	13.20~14.45	16.43
木上 温泉						
二保 温泉						
稜線						
広場						
ロープウェイ(休憩所)						

白毛門沢

清水 英男

期日 35.5.5
メンバー 島村 重・清水英男

賞えた石垣連版道路へして、通る
ハナケの渓まで入る。ここから
沢の逆行開拓地形の良い県境を入
ノーフリッヂが二人を出迎えてく
れた。丘上を通路すると大きくて石
が沢を埋め、丘側の草むのじやを
くわを突張りて通る。

やがて、沢は東黒沢と白毛門
二分され左の白毛門沢に入る。東
黒沢の奥は出合から二回折返し野
つてしるのが見えだ。白毛門沢に
入つてすぐ倒木のかつたナメ津
が二つ現われるが向裏なく左手を
廻すと、水流を三茶に分ける津が
現われる。これも向裏なく左側か
ら沢を横切つて右下から登り、落
口字前で左に出る。すると、ヌ、ス
ノースリッヂが現れて園里に通
り越すと、沢は残雪をうまいに明る
い場所に出る。のどかにウタイン
水鳴き・ソンシ・コスシの花が咲
くこの日本は。トカゲの聲がき
感じてロードサイドである。ほんわか
にステップをつくりながら登行し
丘手に枝沢を興送ると、二〇メー
トルの滝が姿を見せ、その上部に
大滝が水流豊かに見事に落ちてい
る。土台頃までさき出す、こゝで
上野が最終で降りて来る人達を最
後まで見送り、二人で白毛門沢に
入りことにきめる。

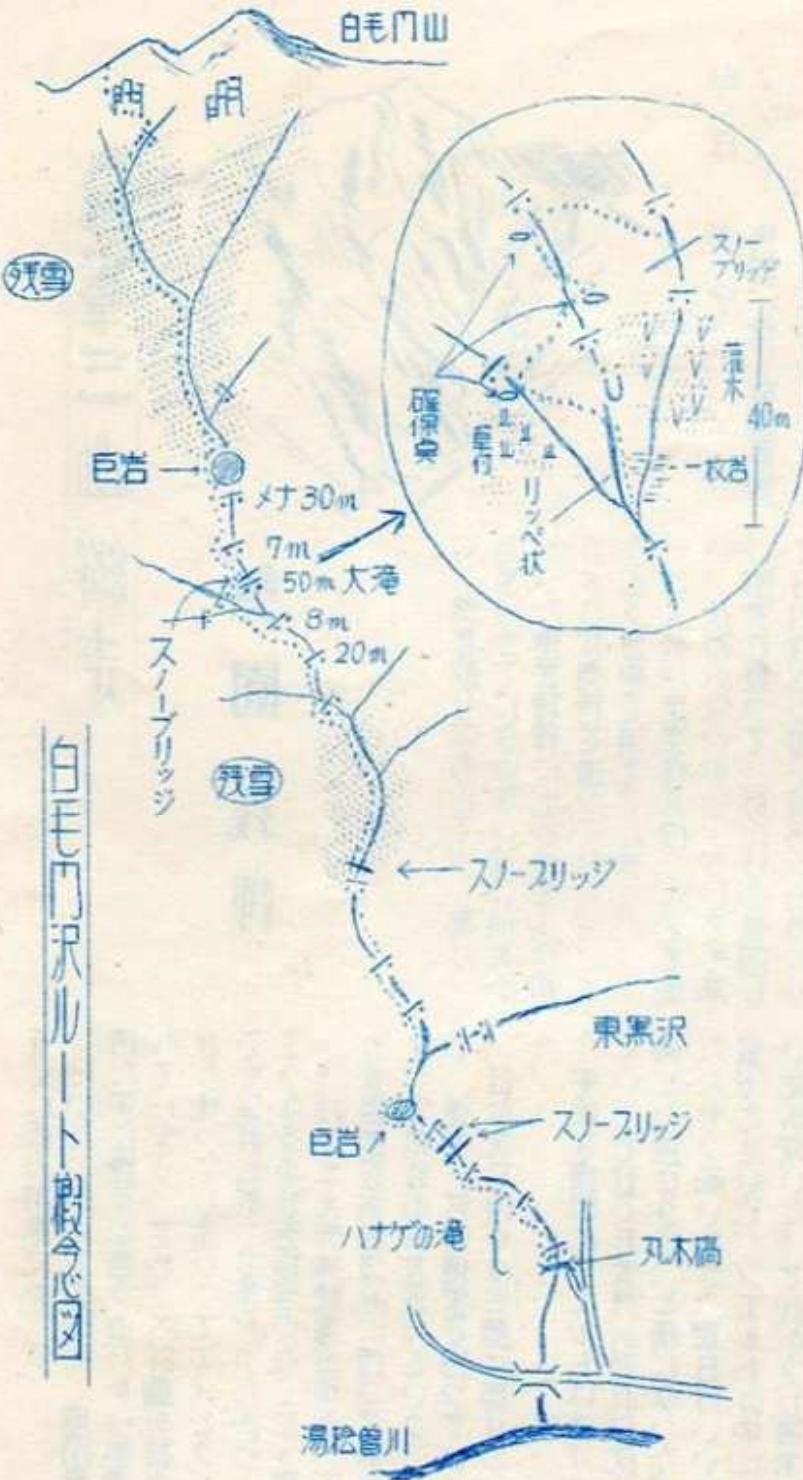
昨日千石ハナケの渓まで入つて

こへからアンサインする。フレ
ーズを渡り切った所下から取り付
いたが、下部がスタンスがこまか
い上に岩が滑れて悪く、体の半分
シャワーを浴びて素悲す。続いて
走りもつたハメートルの渓があり
われ、倒木を利用して左手に取り
付いたが意外にりるく、灌木の根
元の草間に指を立てゝ強引なフリ
クシヨシで走りすと、正面に大渓が

かづりと二重をかさぎ、林立す
人の意気をのみ込むかのように落
ちていた。ゼルアストのバンドを
しの直し、中央へうろここんでい
る渓の下部に取り付き、ハング気
味の下を腰からシャワーを浴びな
がらも岩にかかりつき、水流によ
つて出来たクラシックを手掛りとし
て左側草付のテラス状の所へ斜め
に登り、ここでトングが確保。ジ

ツヘルを繋りに棚状から手がかり
のない一枚岩を灌木を回りがけて登
り、二人しばし走る無理と見とれて
から上面は緩傾斜であるが岩が漏
れおり、三ビット目でワイルを
とく、気が張っていたせいか、頬
からシャワーを浴び全身濡れねず
みにつけた割りには快よい感じで
ある。白毛門沢本谷からそれたら
しいので右側にヤブコヤをやり本

沢に降りる。七メートル、三〇メ
ートルのナメ渓が見事な水滸で落
ち、二人しばし走る無理と見とれて
しめのわるいものであつた。渓の
上に巨石があり左側をまわり込む
と、白毛門の頂上が見え、雪渓が
氣分のわるいものであつた。渓の
上に巨石があり左側をまわり込む
と、白毛門の頂上が見え、雪渓が
始まり、左側からハメートルの渓
を分けた枝が入つた處で小休す
る。小休止の後、豪傑まで向江か
と二俣から左側に入る。傾斜もか
なりあり、慎重にステップをつく
りながら段階下りうづと、岩
場につく。(この間は、乾いた岩
あり、草けあり、二人共ひくく
に岩の感触を楽しむことなく走る
。棱線縦走路には、シマウナ、
コフシの花が咲きほり、湯松川
川から谷川岳主脈、一ノ倉沢、マ
ナガ沢等セガス一つなく眺められ
白毛門沢の完壁に腰がへつては
いたが10時30分、満足の足どりで

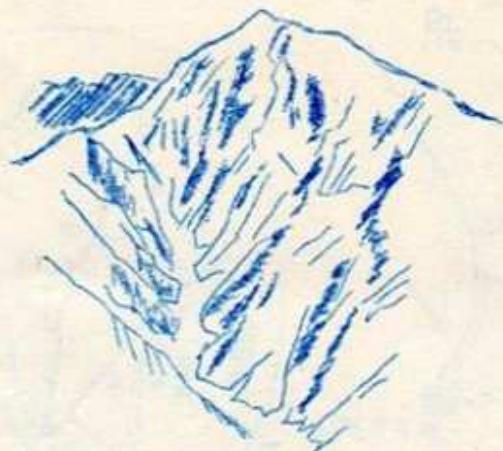


コースタイム	
東黒沢	5.25
ハナオの峠	5.42
白毛門沢	6.15
大滝	7.45~8.10
二俣	9.25
稜線	10.30

下山した。

白峯二山縱走

興園義輝



朝日 9・9
メンバーアルバム・無國界舞
道と向逢つたと気が付いた時、
もう北沢にアーティカへり立んじ
た。私は動く音でも香く澄み渡る
典型的な秋の空を示していて、運
事の氣も知らぬけに光り輝いて
る。(この分では極端に遅いと
したう人多は)ことだらう。(このま
ま北沢をつめてしまおうかとも思
つたが、重い荷と不気味を南アの
沢をつめのといふことに自信がな

縦走　奥園義輝

すぐに飯の用意にか、
たいたい初めての山
頂に登ると、どうの
じてしほう。でもく、
かり狂つてしまい、工
でもなれと思つて来た
こうなるのも至極当然
う。茂マ二人共、蒸箱看
の水場まで水を汲みに
上つて来るのが大変だ
で、道奥一式水場まで
。日が沈む頃やつと飯
かつた道を被縁に出られるよう折
る下りを気持ち辿つてみたが、と
うとう途中で消えてしまった。
二人共ハテ美味では、小走り聖
い。仕方がないから、少しでも高
い前まで登つて、あたりを廻回し
てければ少し血い林の外分るんじ
やないかといつことじ、鳥糞面を
透二番三食する。

被縁に出でると前方に小屋が
見える。人も居る。泡山小屋であ
る。喜びあんで小屋に近づくと、
他の人々友な顔をして僕等の顔を
見る。道元よい所から又ツと現ゆ
れたものだから驚いているのだろう
う。とにかく今日は何處に泊るこ
とにしよう、ということになつて

平坦な場所にツエル
くい。それでも天井か
何とか通じる、と種
たんもつ高いひき、豊
減冷え込んで、ツエル
い花が咲いた。それか
と落花はじめ、シユラ
よひしょに会れてしま
ある。

すぐに飯の用意にかかる。たいたい初めての山に、砲団も停たずに乗ると言うのだからひさしてしまう。でも／＼計画が始めから狂つてしまい、エエイどうともあれと思って乗たのだから、こうなるのも至極当然のこと、思う。埃タ二人共乗橋者のゆえ、下の水場まで水を汲みに行って来た。上つて来るのが大変だといつて、道興一式水場まで帰つて行く。日が沈む頃やうと飯にありついだ。

平坦な場所にツエルトは張りにくい。それでも天井があれば夜は何とか通せる、と便になつたとたんもう高いぢや。翌日はいい加減冷え込んで、ツエルトの中に白い花が咲いた。それが少し暖まるごとにほほはじめ、シユラーフほびしよびしよにみれてしまい不快感もある。

砲門の番山田君だと、朝暗じつうに早々に食事をすませて出発する。ホーコンの東に近くある頃、度数にしつこまつわり付いていた雪がほれ、すばらしい天候にある。上方から色々アリて来た紅葉が、

すぐに飯の用意にかかる。たいたい初めての山に、砲団も停たずに乗ると言うのだからひさしてしまう。でも／＼計画が始めから狂つてしまい、エエイどうともあれと思って乗たのだから、こうなるのも至極当然のこと、思う。埃タ二人共乗橋者のゆえ、下の水場まで水を汲みに行って来た。上つて来るのが大変だといつて、道興一式水場まで帰つて行く。日が沈む頃やうと飯にありついだ。

平坦な場所にツエルトは張りにくく、それでも天井があれば夜は何とか通せる、と便になつたとたんもう高いぢや。翌日はいい加減冷え込んで、ツエルトの中に白い花が咲いた。それが少し暖まるごとにほほはじめ、シユラーフほびしよびしよにみれてしまい不快感もある。

砲門の番山田君だと、朝暗じつうに早々に食事をすませて出発する。ホーコンの東に近くある頃、度数にしつこまつわり付いていた雪がほれ、すばらしい天候にある。上方から色々アリて来た紅葉が、

てして、うぶつ（）の紫色は事に現せぬほど美しい。ホーコンの頭に出ると鐘錶に強風の流れで吹る。北岳バントレスが大津沢に崩れんばかりに压倒的な壁を立てている。強風にあおられるながらもハナウの難舟千景軍道。こゝまで来るとバツトレースに取り付いているパーティが仄く見える。居るは／＼、一泊のマンションにたかづたハエみだいに、十数バー／＼イが各ルートに取り付いている。頂上も銀座並みである。こつた返す中を一日散に向ひ向つて逃げる。凡て相手ら子供がつたが、美しい屋根歩きである。昨日苦斗した吊尾根も、こゝらあたりから見れば民木といなものがである。今日の行程は農路と向ひ向ひ筋道まで歩を進めるといふこと言うと、うどのんびりしてしまう。しかし下りくぼるとのんびりやしていいれない。バタ／＼と走るようになる。

まだ今からつ懸崖苔も散る事も出来ると思つたが、てう急ぐ（）やうに腰い、はるべく木場の道へ向を下しツエルトを張る。今日は昨日に二通り、背面の立

木を利用して、ボンチャヨモギを使い
ゆっくり寝れるようになした。

さて晩飯は玉井である。瓶をま
くつて製作にかかる。相当苦心し
て作ったのであるが、大変な代物
が出来上つてしまつた。不手たり
たうの島村君をいためずかしつ、
わが信心の作品を食つて頂いた。

夜は高度があるためか、やけに
冷えた。暗くなる前に汲んでかい
たコツフェルの水が、刀テン刀ナ
ソに凍つてしまい、夜用に起き
た時、いやに咽喉が乾くので口を
つけたまでは良いが、いつこうに
口の中に入つて来ない。てくてく
ぬ向にヒツクリ返したのかなど
思い、ふく中を見るに完全に凍
りついている。あきらめて寝るこ
とにした。

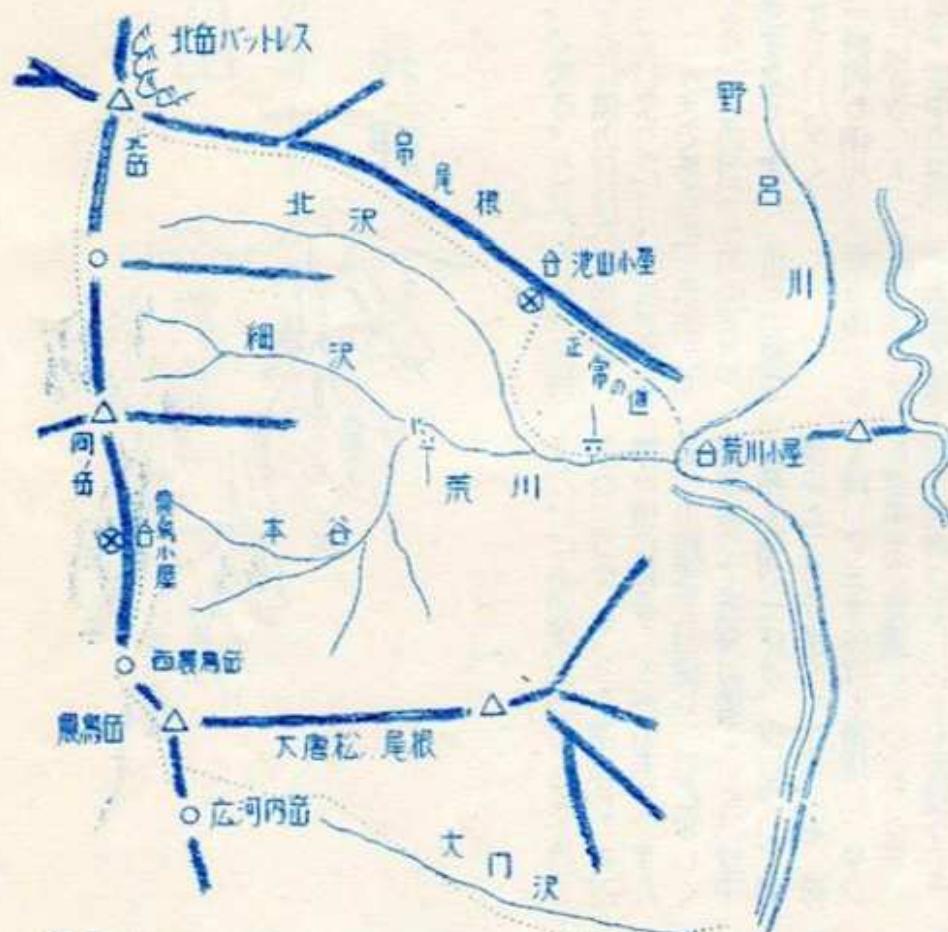
翌朝になると、昨日にも増して
ツエルトの中は白一色の霧氷の花
園と化している。まるで、開けた
迷路に見る冷蔵庫の中とまつたく
変わらない。ゴワゴワになつたボン
チャヨモギを入れると昨日に
較べて大変な各種となつて仕事に
あえない。特にスタイルを気にか
ける僕等若い者は、サックリ食べ
過ぎたフタみたいて大きくなつて

いたんでは、山角の山行七回目が
半減する。

暗い中をライトの灯りを繋りに
農場の登りにかかる。急登・また
急登でフレマー語つて足を小さく
うになつた頃、西山の頂上に着

く。ちふうと太陽も上り、雪をい
ただく北アルプスの稜線が曰く尾
根を引いて見える。鳩見岳や赤石岳
も空々たる根張りを見せて、南の
方に鐘座ましまして、日の当
にかかる。この三日向よく天気が
つかき、云りがたい気質であるが
いかんせん餌がなくては下るより
手がない。この下りも、あつたく
足泣けのひとい下りである。足が
ガクガクになり、半分も下りぬく
うちに走り出した。やつと農坂を下
りきり、次に出た時はひつくり返
つてしきつた。

二、かり旅り返つて見る紅葉も
又寒に素晴らしかつた。下りにく
ない下りたくないといつてとは反
対に、足だけは天のふうに歩き続
ける。途中の水場でちふうと休み
またトンカツを歩き出す。西山温
泉のバス停に着いた時はマスクに
くたびれた。



春の後立山

鹿島槍ヶ岳

奥園義輝



明　日　3月4・30～6

メシバ一 貢誠也・奥園義輝

山原信蔵・

四月三日

車に積み込んだいなか、食料等を
積んで午后九時浦和駅ホームで

高野さんとの旅、船宿へ出で十一
時半の「オニコ号」にて出発。
八万尾船の通りへのスキーラン以外
登山道の遙は見当つぽい。衆に生
産を頼る。

四月四日

松本に早朝着、大糸線木ノ木で
山原さんを加える。天気はすこぶ
る悪く、いつ止じとも知れない雨
である。大町でバスを待つ間、午

を頃つて来る。どうしたわけか同
じ手なのに僕のだけ八十円高い。
フサッてしまつた。バスにて鹿島
槍じ、こゝまで来ると一筋雨が激
しくなる。この方ばかり山本でた
と腰をするぞしまい、近くの家で
休ませてもらつた。

小一時間も休んだと思つ頃少し
小降りにぱつたあうのでさつそ
く出発。途中の道は、水の通る道
と化してすこぶる悪い。丸山まで
三人六名かよく流れの中につか
てしまい、すつかり意氣消沈して
しまつた。

大河原の小屋で二時間程休んで
濡れたものを乾かす。雨もあがつ
たようなど、今日中に西股の出
合までへることにして出発。河原

すたいに小沢出合へまで行つ
たら、ゴウくたる風流のため刃
近くの白地のめぐらでラッセルで走
める。途中で口から入つてくる小
さな沢を渡るべく、また道を下し
て一番渡りやすひと段落の雪
堤のど二三で道がどすれた為、河
堤を降して三十分ほど道探し。やつ
と途中まで見通しがついたので、
荷を背負つてトレールを追つて一

かつりで今日の墓地を廻す。
高野さんと山県さんがテント云
張つてゐる間、僕は明日のため先
の方の便祭に行く。墓地より西
股出合までは約十分、出合には西
股よりのデアリが累々と重なり、
完全に沢を埋めつくしている。赤

岩尾根への取り付とは、このアブ
リを渡つて行けると思つたが、北
股側に少し入つたところに沢木の
構がかつてあり案じたこともひ

原に出る。そこを大休止。東山は
は大谷原より西股出合までだ。も

の

の一時間はかくらむこと四つ。

花

咲として岩をコロコロと落しづか
う滇れる湯流を見てゐる。自然

の

対岸の口みたいになつた雪原を真
っ茶色の水が石をかみ、怒濤を真
空くいきおいで流れ始め、三人寝

きのんでも見つねるうち、もの、寂

分どう、ない間に、一つの流れて
作つてしまつた。なんだかこれ以
上進むのがおそじ氣がしてき

たが、すぐに腰をあけ、前方出合

近くの白地のめぐらでラッセルで走
める。途中で口から入つてくる小

さな沢を渡るべく、また道を下し

て一番渡りやすひと段落の雪

堤をくずし道を作る。これで今日の

悪場は終つたらし。すぐに前を

見て

河原伝いにはとても行けそうも

なく、裏道を環さなくてはとても

西股出合まで入ることはできない

。やつと左岸の岩尾根の山腹に行

って、おれだ東道を追つてラツセルし

いい加減バテた所で我慢した河

かつた。すぐに駆け、つた道を
引返す。明日は天候に任のりしが

コースタイム	8.30
鹿島部落	10.30
大谷原	～ 12.40
集水塔	13.30
幕宮地	16.08

天気は良し。満天の星空だ。高千穂平に近く空つた處で大休止。そこで夜も明け、鹿島槍の南北峯や爺ヶ岳が目前にそそり立つ。夜を舐めながら二人並んでキジ狩り。壯快な気分である。

高千穂川には大阪凹石大バーク
イグメントを乗つていた。高千穂

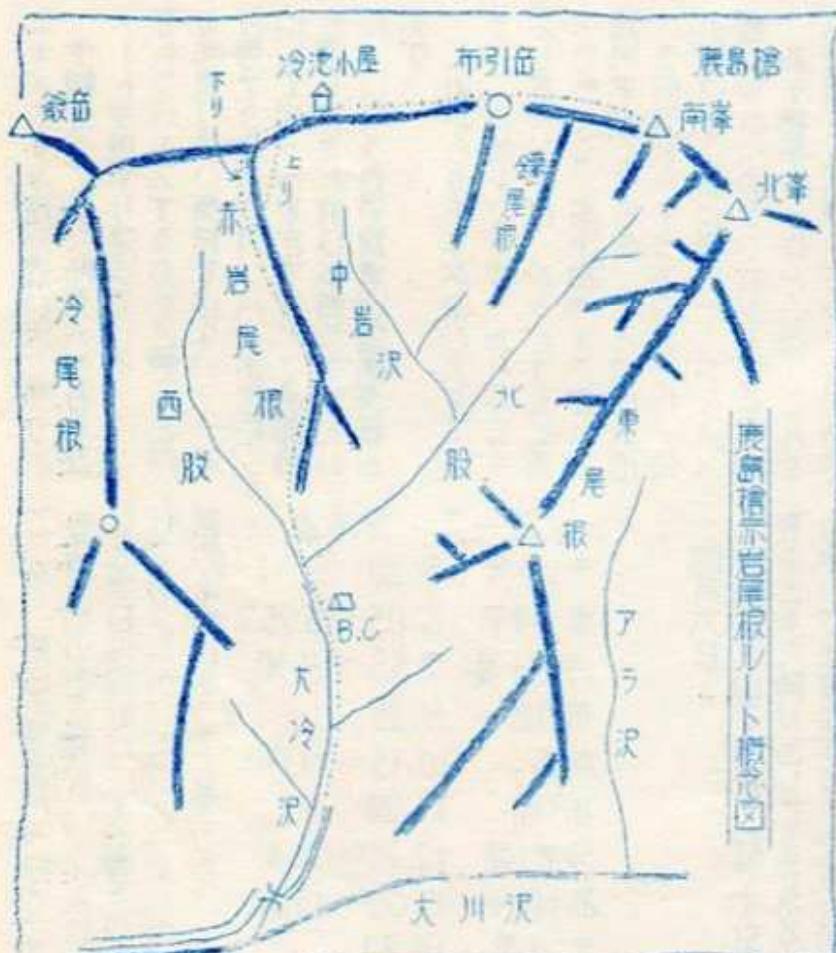
平より主役級までは夏のタイムと
ほとんど交りない。途中役級に出て
る所は、「スノーリツナ」とよつた。
「うから中間の達松席まで直登。
通井がきつい。それより深い沢を
へだてた夏道の見える所まで水平
にトラバース、この途中で僕のア
イゼンに雪がタンゴになつて食い

聞いたためバランスがくずれ、二メートルほどスリップして流されましたが、この冬の豪雪での訓練がもとのをいつてか、すぐに食べ止めたことが出来た。あとは枝葉の整理で何處かく通過。こゝまで来ると、立山が一望のもとに眺められ、枝葉は雪庇が化粧本谷の方へ大手

四月五日
山原さんち野田木の中に着ついた
ところ、野菜の供給が再発したと
か、今日はテントヨーパーに日本
のものとシウ。そこで菅野さんと
二人でトントを階じうちに出発。
朝食を終めて野田の娘が、おまけ

四月

分つてしまふ。何の心配ひよく
対岸の赤岩屋根に取り付け、渋木
は昨日にくらべて着しく減つてい
る。しかし下りにはまたどうなる
か。取り口きからは東北回を直角
には腰かくまつたら底面頭を
起す可能性がある。下りが心配だ
。樹林の中の危険。ライトの灯り
を残り、夏道通りランビルの向
方も近くアイビンのちしょ音を耳
にしながら汗して登る。



今度小屋は初詣、田舎へむ誰も居らず、シンとしてソラ。ソトドモ同食をとりながら一休か。チキは珍しく暑いくらいである。ソレでして見ると南木田アリバウマの花が咲いていた。住は一時向足らずで行口ひもつぶさに返もする。

るもつにあぐ。布引岳への登り口は
雪が積じていて、アーピングを
着けたまゝ、登る。だが、布引の便
上に立つて見ると、南峯までほん
んど東道が出ている。奥、アーピン
・オーバーシューズは脱ぐことに
する。一歩ふるともう東山である。
布引より五十分钟左右で南峯の頂上
に着く。北峯までもと思つたが、
イマに体がだるいのでやめにする。
吉野さんは今日二度目のキジ狩り、

原上から三三四四十度、河の下へ
走るもののむかへ、断崖せきしゃが
もとである。

飯を食つて四万の歓喜を榮しん
で、写真を撮つて、思ひは分蓮ん

だ後、下山にかかる。布引を越え
て、淀川屋の中向あたりまで来る
と、もう日がゆるんで股のあたり
までやぐつてしまふ。これでは、

また昨日と同じく靴の中が濡れてしまつので、すぐにオーバーアンダースをはき、アイゼンをつけた。その間にます／＼書くぶりだしたのを抜きに、中に着ている長袖のラ

・
「ニンスシヤツも脱いでしちつた。
冷祀小屋に着くとまた腰がへつ
たので向食をとる。テルモスをせ
ると力ヲにびつているので屋根の
トタンにかじりついで、溶けて未
だ水を飲め、まだ下りもある」と
て、根氣よく水を集めテルモス
につめる。

ス、ラ朝宮分した所に来る。×
うち西朝でつるため、赤岩尾根の
安堵まで登り、大きめの道松には
イルをかけて、アツフサイレンで
中向の道松まで下る。そこから
フクシユ添いに赤岩尾根のスノーリ
リッナと同高位の奥まで下る。中

二十メートル程の浅い沢であるが、今朝登つて未だ部分が切れて五メートル程すり落ちている。どうをトライバースするのかと思ふと内にあまりよい気持ではない。一本の強そうなタケカンバの木をジンにしてジップヘルをする。この部分を渡り終えた時は本当に波々とした。いたる處で崩壊の音がする。

これがからの下りがまた大変である。一分腰かどこですかりゆるんでしまつた瞬間、どうかすると胸あたりの骨が。高十釐半まで食りこむ時向半身よじれれば、下りは全く腰の二腰画もかゝつてしまつた。この僕はやく腰に来て一トツノ言ふばかりのラジカルである。

高千穂王で一休の添へんと
は菅野さんがツツギル。この分で
はテントまで下りつくのは夜にな
つてしまふのではないかと思つた
が、便所のきつい所が多くてその
分だけ早く下ることができた。木
端の田舎の焼肉屋が一仕事だと思
つてはいたが、案に相違して衆に下
ることかってきた。北駿本谷の水箱
も増えているかと思つたら、ラ朝
と回りである。水も流れに注ぐ

コース・タイム	
テント完	3.20
高千穂平	6.05~6.25
冷池小屋	7.55~8.30
布引岳	9.25
南峰	10.15~11.00
布引宿	11.20
冷池小屋	12.20~12.45
高千穂平	15.00~15.20
テント着	16.30

コース・タイム	
幕宮地苑	6.30
大谷原	7.50
鹿島部落	9.20
	～ 8.30



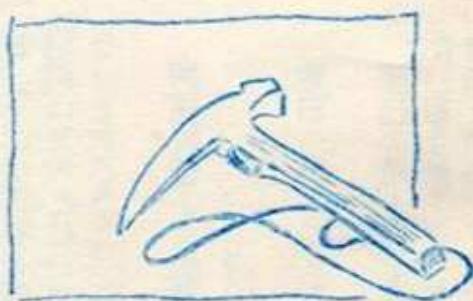
イム
~6.25
~8.30
~11.00
~12.45
~15.20
でいる。昨日の潮流が一日でこう
も變るもののかと驚いた。なんにし
ても今日は疲れた。すぐ寝るつま
りであったが、どうくねたの日
夜の十時になつてしまつた。

コース・タ	リ
ニット壳	3.20
高千穂干	6.05~
冷池小屋	7.55~
布引岳	9.25
南峰	10.15~
布引岳	11.20
冷池小屋	12.20~
高千穂平	15.00~
テント場	16.30

谷川岳一ノ倉沢

中央棱

牧野 雄



朝日 39.6.14
メンバーリンネル・森野等雄
今日は南坡を登ろうと中央棱の基部まで登つて見ると、南坡カルートは人の列がつづき、バルコニー入りが一杯だ。これでは到底今日には南坡は登れそうもないのでも、予定を変更することにした。いろいろと考えたが、雪上用具を持参していないので、残雪に埋まっている各ルンゼは登れそうもないのが中央棱にする。

天気も良いので、のんびりと登攀準備をしている間に、2パートを立てる。まず、南側のオーハンスや津波下部のトラバースの登攀を、たかみの見物としやれ込む。

晴空の国境稜線から白いガスが谷間に舞い降りて来たと思ったら、とうとう白い世界になり雨が降り出した。40分も待たされたおかげで、私が登る時にはすっかり岩は濡れてしまった。

テラスから25歩ほど奥から、丘にトラバースして中央棱向頭の悪相のナムニー下のテラスに入る。さつとアタックする。ナムニーは全体にかぶり気味で上部はすこし左にかたむいている。まず凹状の左の角に取り付く25歩くらいで凹角内にもどりそのまま10歩登つてナムニーに入る。ナムニーはバック・アンド・ナイで登るが、体が外に這い出されるいやなところだ。出口の右手にアフミをかけて乗越す。我々は用具が足りず20歩を2ヒッチにわけて登つたが、中間にレッヂがなく、不安定なジツフェルをさせられいやな思いをした。

ナムニー上からは、エボシ側の達木帯を駆け登り、また棱線に戻

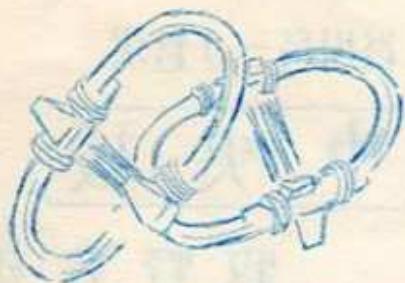
が良く一ノ倉の谷が一望できる。南立のオーハンスや津波下部のトラバースの登攀を、たかみの見物としやれ込む。

南立の頭を下げるあたりで雨も上がり、やっと奥座岩につく。これまで緊張した攀攀から解放されたが、一ノ倉岳を越えての長い道を下山しなければならないので、ゆっくりやすんでもいいけれど、重い足を引きずつて下山にかかる。

(わたくしは、時間の関係で上部は連続を行したりで全体で9ビッチですんだが、普通なら10ビッチになるだろう。)



八ヶ岳冬期合宿



期間：38.12.29～
39.1.5
メンバー：菅野ほか11名

合宿概要

昭和38年冬山合宿は、新人養成と中級以上の積雪期のバリエーションヨンルートの登攀などということを目的に、合宿地を八ヶ岳に決定した。八ヶ岳で口食い足りないといふ声もあつたが、復元の合意抵觸からすれば、このあたりが困難といつて免だらう。

まず期間は38年12月29日から翌年の1月5日までとし、その間に阿弥陀岳から硫黄岳と主稜線走、阿弥陀北稜、赤岳西壁主稜、ショウゴ沢、裏向心レンセと各自、力に応じたルートを選択して登った。それで、阿弥陀岳西表と北西斜面の岩名ルンセにおける初へのアイゼン、ピッケルの練習等も、一応、自分は充分とはいからくとも達することができた。（奥園秀謙）

阿弥陀岳～硫黄岳視点
本 沢 直 彦

期日 38.12.30

昨日の荷上げで疲れてぐっすり眠り目を醒すと、5時半、起床の時間である。すぐに寝袋を丸め、

テント内を片手で朝食である。この朝食がまた何と、餅4ヶとお茶だけというわびしいものである。8時5分、朝食を食べ終り出発した。

すこし歩くとすぐに行者小屋に着き、そこより走上り登り切ると、坂の前がバツと開けて、富士の雄大な姿が見える。こゝが阿弥陀岳のコルである。小休止を取り阿弥陀岳へ向う。頂上着き時50分。まずはらしい景色を眺め写真をとつて「先は長いぞ」ということをすぐ出来た。

再びコルへ下り、こゝでまた一休みかと思ったら、菅野さんがうしろから「休まずに行こう」とあおるので、そのまま、中岳に向つ。途中は雪ホクすぐアイゼンか可えどうほくらりであつた。

中岳を通り赤岳へと向う。赤岳の頂上には、何バーティか、写真をとつたり食事をしたりとたむろしていたが、我々はそのまま下つて山荘小屋に入ろうと思ひ半分入りかけると、「どうも小屋番が居るらしい」というので、すぐにとび出して外で富士を眺めながら食を取つた。昼食はバサ／＼した

ドーナツかようなものなりで、力に通らず不可が出来た。凍つたミカンは甘みがあり水分もあって大変おいしかつた。12時15分、横岳へ向う。何といふこともなく横岳も過ぎ、だまつ広い硫黄岳に着いたのが一時50分。こゝから今まで歩いて来た道を振り返つてみると、逆光線の中に阿弥陀岳、中岳、赤岳、そり向うには南アルプス、また右手に北アルプス寺が望えます。さてこれからは赤岳温泉へ下る一方なので、どんどんと下つていく。このあたりから朝のモチキだけのクチが出来はじめ、「餅4ヶだけ」、「餅4ヶじや、バテる」といふが、らも柳川北床に着く。こゝには水が生てあり、テルモスの中のお湯と入れ換える。テルモスの湯を明るい廻で見てみると、次の木と比べて何ときたないのだろうとかつかりする。そこから赤岳温泉を通り中山集落にかかる。焼き道をさらに直上したので、コルを越えてついにハテて一休が。三十分ばかり下つてテント場に帰つて来た。3時20分であつた。

今晩は栄養をつけておつといつて

とで、バーベキュー・ソースで肉を焼き一パイやつた。この焼肉は大変うまく、そのスープでチャーハンを作つてまた食べるよう仕合だつた。

このように、合宿才一日目は寝走はうまくいくし、最後には美味しいものを食べられたので、全員安らかに眠りにつきました。

阿弥陀岳北稜

清水 英男

期日 3月12・31
メンバー 菅野達也・奥園秀輝・
本沢直彦・清水英男・

前夜から天気がよく、計画どおり全員張り切つてテントを出る。正面には大同様、小同心が、また右手には主峰赤岳が見事な姿を見せている。少しクラストした雪面にアイゼンが気持ちよく、阿弥陀岳のコルへ行く夏径をピッチを上げていった。コルへの道を石にそれて北壁への取り口に向う。ハケ岳の岩場の中でホビュラーハルートとして多くの登山者に登られているこの北稜に、今日も数

パーティが入つていた。最初はTPから登つていくつもりでしたが、先行パーティがもたついていたので、直接オ一岩壁の下まで処々にハイマツの根がよきやな道を一気に登る。オ一岩壁の下約50メートル傾斜が急な上に、カシ木の下を這うように登るのでつまら無い處であつた。

オ一岩壁の下に出ると、寒風をまともに受け身がちぢむ。吹きだまりの雪面に大きなバケツを作り

サイル工作をする。トソフは菅野さんで、左手に取り付き、傾壁の中にもハイヒヅナでサイルをのはす。この岩壁は正面から取り付くのが正規のルートらしいが、先行パーティが取り付けていたので左手にまわり込み、豊富なホールドしむ音と手に快適に登り切る。

オ一岩壁は、またも先行パーティが取り付けていたので、彼等の手にまわり込み、豊富なホールドしむ音と手に快適に登り切る。赤岳西壁は、80度にも近い斜面で赤岳沢へ落ちて、途中にアーチが気持ちよく、阿弥陀岳のコルへ行く夏径をピッチを上げていった。コルへの道を石にそれて北壁への取り口に向う。ハケ岳の岩場の中でホビュラーハルートとして多くの登山者に登っているこの北稜に、今日も数

スタンスがあつたのでこれを利用し、トランバース気味に正面に出てから登つていくつもりでしたか、リッタのマイボットは、この手に登り切つた。この壁を登りきると頂上が真近かで、始めアイフリツチを行き、次はハイマツの中をジクサクに登行して、コルからの道に合して頂上である。

頂上で記念写真をとり、回食をつめ込んで、今日は後発隊が入る日なので途中まで出迎へようと早に下る。

赤岳西壁主稜(北峯リツナ)

奥園秀輝

期日 3月1-1
メンバー 菅野達也・牧野要雄
奥園秀輝・

赤岳から峠の松原へ続く稜線より見る赤岳西壁は、80度にも近い斜面で赤岳沢へ落ちて、途中にアーチが気持ちよく、阿弥陀岳のコルへ行く夏径をピッチを上げていった。コルへの道を石にそれて北壁への取り口に向う。ハケ岳の岩場の中でホビュラーハルートとして多くの登山者に登っているこの北稜に、今日も数

ある同じよつは赤岳の壁を上部若壁と呼んでいるようである。このリッタのマイボットは、この手に登つた。この壁を登りきると頂上が真近かで、始めアイフリツチを行き、次はハイマツの中をジクサクに登行して、コルからの道に合して頂上である。

頂上で記念写真をとり、回食をつめ込んで、今日は後発隊が入る日なので途中まで出迎へようと早に下る。

さき、下部の木にピッケルでスタンスをつくりながら途中まで登つたが、どうも元気のパーティは口岸のショルター・リツナ寄りをまいているらしく、我々もハックして石岸をまく。先にパーティが丘ルンゼの泡瀬を越すのに苦戦している。我々三人はそこから壁の下を雪のバンドに沿つて主稜の背に出る。出た处かコル状になつていてここでアンサイレンする。このアンサイレンするため僕がサツクリから三ヶ道具を出す際、カラビナを一回下へ落してしまつた。「しまつた」と思ったが後の祭り。

フがたつてじるが、それをドドで
御壁は約二〇木ロレン位側にアラ
バース。こゝからまだ高時量等に
移る。轟野さんトツフで西の辺
非常に窓口の多い洋いルン位を登
る、このルン位は七・八木で終り
、そこから今度はまたも窓口の多く
い面はじりの壁を見る。落口に後
続は冷汗をかゝれる。このビヅ
ナも約二〇木。この部分を登り切
ると、また雪かけいた細いリツナ
を五〇木ほどコンティニアスで登
る。

みるより、何度見ても銳くなる
とはいひ尤敷である。

大きな壁、つまり上部石壁に
き当る。正面はちよつと無理な
で、また石ルンビ側にトラバ一
して、刀ンチ状かところでトツ
を確保。こゝも約二〇メ。石ルン
で括りを要るのであるが、こゝ
今迄の更とはちよつとうがつて
もしつかりしていく快適は登り
山マハナムニーに入ると強い風
こゝまで入り込めず、まつて
腰かい。

スで登ると三木ほどのナムニーに
ぶつかるが、それを楽にバスして
極席にモロいがれまちりの雪壁を
登ると、ゆるやかなハイマツの荔
の雪の尾根である。足元を見なが
ら登つていると、ひよっこり北塗
からショルター寄りの縦走路にと
び出した。

夙夜避けるにぬ、北塗の小屋に
入ると佐々木、島村の両君が待つ
ていて、五人そろつて晩飯を食べ
た後、穂先とのコルからベースへ
下る。

ジョ・ゴズ
佐々木 武夫

テムニーを出ると、西ルンで暫りにちよつとトラバース。これかの最後の壁を登ることになる。壁を登らずに右の方へ二〇木ほどトラバースすれば、やゝレソウブルンなどが前面に食い込んでいるが、トラバースはい、加減イヤにならずいたらしく、宮野さん、レツナからニ木ほど登り、そこから五木ほどトラバース。クラツクが一本走つているが、それを登らず石の壁を登る。その方がやさしかつたのかスルくと登つてしまつた。この部分が主稜の登攀では一番面白かったようだ。あとはまた五〇木ほど、複の指をコンティニア

五時四十五分起床。ラーメンをすり方茶をのんで身体を暖めた。八時出発。赤岳鉱泉の小屋の裏手を通りジョーコ湖へ行く。八時三五分沢につき、石岸通しにつのる。前日に入つたらしくトレースが続いている。例不が多く荒れた沢である。

二〇分ほどでセ木の木渓が正面に現われる。これがFである。続いて五木のナメ状のF。やがて沢面が湧きているだけで直登不可能として捷道を通る。これは右岸にある。F₄（四木）を越えるとショーゴ沢右股分歧に出る。このあたりから広く開放的になる。

寒風ルンビ

期日 39.1.9
メンバ・奥園義輝・牧野豊津

ある。F4(=四木)を越えるとジヨーネーが右股分歧に出る。このあたりから広く開放的になる。

F5四木、ゴルジョ状のF6、十木の階段状のF7と現われる。こゝからは正面に硫黄岳が望める。沢は三股に分れる。中央は直登不能の為、石の沢を行きハイマツの小さな尾根にトラバースして中央の沢に入る。こゝから稜線までは、うすく雪にお、われたハイマツの上

校棒に出て小休止の後、硫黄岳へ登る。こゝから十分ほどでいかれる。硫黄岳の展望は良く、南ア・北アと望むことができた。頂上でしばらく毛ろしたのち、赤岳軒泉への下降路をとりベースに戻る。今日登つて来たショーゴ沢を元に見下しながら、

東色に色々なれに鉢巻を横に見て、東向ベルソンでに入る。沢は間木に埋もれ、赤褐色の岩が積み重なり荒々しい道の中を踏跡を追う。積雪量は一木前後で、その下にかすかに水音が聞えてくる。F1は十木、下部が氷屑にくすもれてはるが、上部は完全に氷化している。中央をカツテンスにてバス。F2までは雪と氷の危糸面。F2三才木、冰滌で三段である。下部は石手を直上し、岩に頭を押えられたところで中央にトラバース気味に出るが、かぶつている上に氷が甘く、ホールドを切ると氷が吹き出てまとめて溶る。一氷のたまつたホールドに指をつ、込んで、やっと乗越す。中・上部は共に階段状で傾斜があるが容易、濡れた衣類、手袋はすぐ凍ってしまう。F3は短いながら冰滌としては最高であった。左手の窓沢部より取付



くが出口がかぶつているため思つ
ようにヒツアルが振れず、トソア
は非常に苦手する。こゝにてアン
サインの時を知り、ヒカンドは
割にらくにかす。F4(20メートル)傾斜
は70度～80度だが階段状にて容
易。F5(30メートル)は正面の氷壁を取
壊、右岸の岩壁にルートをとる。
ホテルド・スタンス共に豊かで快
適なカンテを七メートルほど登った奥に
ステ繩の付いた残置バークンあり
、こゝより直ぐにトラバース。あ
とは縦のい両面と、短かい隣の
出た氷壁をコンティニアスで登る
。H6(15メートル)は氷を全く付けずに
黒々と輝いてくる。

ほしの岩様と、丘手よりのびた枝葉
とによつてぐつと狹められてゐる
。我々は丘頭岩壁(下圖)正面壁
の基部につゝくものと思う)を丘
ばらの上方にのびる草付バンドに
サイルをのばした。バンドは不安
定な草付や落石はあるが、わり
に簡単であつた。

滝上には二股に分れ、丘股才明る
く展开て穂やかに枝葉に消えてい
る。右股は北稜の支棱や小ルンセ
が入り乱れて複雑な状態になつて
いる。丘股は簡単なので右股に入
ることにする。急なガラ場を少し
登ると、また二股でこ、モロに進
む。二木のナムニー様の水滸を越
すと、両岸が狭まり急な木雪のル
ンセとなる。二ロツチ程で急に日
の前が明るくなつたと思つたら、

可能だつた。右手の60度ほどのガレを雪の斜面を登り積み立つ。コツア状のルンゼがドームにつき上げていてるのが見える。（大同山北壁らしい）

今、立つていてるこの棲も上部は壁に絶れている。北壁側にのびている草付バンドを伝い、草付の壁を直すべく、凍土にロツクハ

ーベンを打つて、吊り上げを重ねて六木程アイルをのはしたが、凡化のはげしい岩にかわり、ハーベンが全く打てなくなり、トツアルはフリフショーンですり上ろうとするが動きがどれず苦戦する。ドンツマリの壁のため日当り薄く手足の感覚が失なわれる。凍傷の危険があるので登攀を中止する。

吹雪の中のツアーハイキング



吹き荒れる吹雪の中に、かすかに見える足元の雪面は、之ぐられんように下りになつていた。真輪山をまき落り、左に廻りこんで目標の樹林帯までゆく登りになつていてるはずなのに、白い世界の中にもがくよう、一步踏み出したスキーパーは、人向の意志とは無関係に、サーツとボラしき中に滑り込んってしまった。後続の何人かが転げ落ちる。次は裏に下りになつている、ルートを誤ったことはも

はや明らかであつた。ハタキよく引返すことに決定する。

全員十五名、絶体に離れるなど念を押し、オーターを整えて退却にかかる。とたんに裏向うから吹雪をあび、目を開けていられない。眉毛からまつ毛とどう雪が凍りつくのを手でもそ取りながら、只に向つての辛い歩みが始まる。

未だときのトレースはもはや全く分らず、何の目標物もない雪原を破石とバロメーターダけを繰りに、ラツセルとシユカフラに足をとられながら進む。「頬がおかしくなつた」「垢がきかなくなつた」と叫び仲間にもんでもらう者、シールのはずれる者などが次々に出てその度に一行のサミは止められる。塗り重ると三人目ぐらいか

ら後は裏うねにかくされて見えない。この行列のどこかで五メートル離れたところでペーティは寸前されてしまうこと必定である。また歩き出す。トンスルギヤツアには落ち込み一瞬視界から消える。また現われる。

と分つたのは半分ぐらいで、芳とだまつた雪原をトラバースして居れなかつたら、そこに辿りつまでも誰か動けばなくなつたら……穴は掘れるだろうか……とにかく全員を無事に下ろさなくては……

もしさが先の樹林帯まで、この夜行列車が翌朝大宮駅に着く頃、お互いの顔に無意味な赤紫色のアサを見たのであつた。

悪天候に強行した吳、スキーツアーだと身仕度を甘く考えた吳、また凍傷は殆んどが退却の最初の三十分足らずの間、吹雪に真正面から向つた間に受けたと思われる卓一月の抨るしゃー、また一度安全帯に迷子こんだとき、安心のあまり何の手当もしなかつた吳など反省すべきことが多い。

結局一時間余で出発吳の真輪山の樹林帯に辿りついた。

一行の殆んどが一乃至二度の腹痛でしまつた。後続の何人かが転げ落ちる。次は裏に下りになつている、ルートを誤ったことはも

或る敗退

—高屏岩中央カンテ—

辻勝四郎



(昭和39年7月の記録)

ワイルは一人でいくら刀を合せて引いてみても、ナイロンの伸張分が手元に手繩られるだけで、手を放すと再び元に戻った。幾度かの繰返しの後、僕等はようやく疲労の累をさどつてテラスに腰を下した。原因は明らかだった。二本のサイルの結び目が、岩の割れ目にでも喰いこんでしまったのだ。今までの登攀で僕にはモフ登り返す刃が湧いて来なかつた。性

急に決断を下すことをためらつた僕等は、思案の末にヒパークを決めた。

四時、まだあたりは明るい。テラスには幸い體を下すスペースはある。ビレーのハーケンを打つ。テラスには残つてゐるサイルで身体を確保する。衣類を身につける。食事も水も充分にある。さて、今日

は僕にとつて何年末の宿題のルートだつた。初めて屏風のアロフレルに達した時、それが北摩根木園の壁面にしかさきないという存在感の是非とは別に、石岡氏の初登記録の強烈な印象も手伝つて、僕は壁に惹かれた。だが中央カントリーホールドは、複雑事故や相棒を得られないこともあつて計画は何回かは折した。

この年、僕は中央カントリーホールドの一つのポイントにあつた。

だが五月連休前、思い切けず盲腸を病ひ、回復後も天候に災いされて始んどトレーニングが出来なかつた。三十一になる僕には、体力的に不安があつたが、とにかくぶつかつてみよつと、中央カントリーホールド、奥又白峰新村・北条ルート等を計画して延び上つた。上部はハンクして延び上つた。上部はハンクして延び上つた。上部はハンクして延び上つた。上部はハンクして延び上つた。反り身になりながら、左手に延びている外側に元に残つてゐるサイルで身体を確保する。衣類を身につける。食事も水も充分にある。さて、今日

七時、八高テラスでドッペルのサイルを付けた。灌木の巣石帯をニビツナ。そして更に急な巣石帯を草付と灌木を覆りにニビツナ登る。灌木のテラスからルートはがん悪くなつた。いく立ちへんなハーケンにアスミを掛け、不安定な体勢から、岩から割れそつた小落石に投げて、僕は思い切つて延び上つた。上部はハンクして延び上つた。上部はハンクして延び上つた。反り身になりながら、左手に延びている外側に元に残つてゐるサイルで身体を確保する。衣類を身につける。食事も水も充分にある。さて、今日

明、僕等はライトを灯して巣室のテントを出た。

はい。上部は、右手は灌木が多かったが、左手は大きほ子のつけようもない壁だった。そこは明らかに岩溝の底だった。僕はショードル状の凹角を、投縋を使ってなあものび上った。だが苦のついたスラフには足らずも出なかった。そこで我々はルートの見当が付かなくなつたのだ。

ルート図で探つても現在地臭がアマフヤだつた。アリスム偵察の甘さがくやまれた。そして、今後の行動の一切が僕の判断によひかれた。取り付けてから、バケに時間が過ぎていて、予想に反した悪い草付に、僕はもうい、加減へきえをしていた。中央カンチに寄せて、いた期待は、こんな違つた草付の登攀ではなかつに苦だ。僕はそこで断を下した。

「よし、今日は下降して、明日インゼルを登ろう。」四十本いっぽいの腰の垂るアサイレン。だからもなく、そのサイルが動かなくなつたのだ。

元程から、今年から始まつたと

いう山小屋への荷上げのヘリコアターが、何回も我々の日の前をかすめては往復を繰り返していた。足元は小気味よく切れ落つていて、底を横尾谷の音もはく流れていた。穂高への往還の登山者の姿が、まさしく蝶の列だつた。あるいは何の性格もなく動ひしている、しぐれより前のこの次元が、明るいうちからじばーく懸勢に入つている僕には何か妙だつた。

明日の行動予定は既に決つて、アマフヤだつた。シート・ズンの現在、少なくとも一パートは立つてあるだろう。常理をしないでこれまで待機して、サイル回収の手を借りよう。それが駄目なら、ラフ・ライダーナウとしてサイル回収を試みる。だが体調悪化しない時は、安全を期してサイルを切る。そして三つ道真・アフミ等すべてを動員して何とかこまで断を下した。

「よし、今日は下降して、明日インゼルを登ろう。」四十本いっぽいの腰の垂るアサイレン。だからもなく、そのサイルが動かなくなつたのだ。

「軽を左右するのが明日の天候だつた。雨が降れば、フライマーはまづ登つて来まい。草まじりの岩壁は、じよく状態が悪くなる。その不安を暗示するように、元

じわくと横尾谷に夜が舞い降りて来る。雷鳴が稀釋を伴なう。は考へてせれば、激しい音響とは裏腹な幼いロマンティシズムにすきなかつた。

坂野は、窓の口からテラスに岩用に丸くなつて寝入つて、頭が汗えてなかくに寝付けない。涙草に火をつける。誰かが湧いてくる——。

足がテラスから外れてハツと目が離れた。僕は屏風に居るんだな」と思う。それから向時回たつたろうか。ふと目を醒ますと、あたりが明るくなつていて、月が出たのだ。雷鳴もいつか遠のいて、夜晴らしい星空だつた。

「予定では、この星空を屏風の鏡で眺めるはずだつたな。」僕は、初めての酒呑みて通えた星夜のことを見り出す。天蓋の一角の屏風の鏡にも無数の星が舞い降りて、それはまさしくシルフィード。

夜のしらべ、明けに目が覚める。灰色の空には、まだ星が残つて、アルコールの回つた僕は、唯一人亥の世界に酔いながら見たものだ。

「同時に屏風を登つたら、俺

いくまでも星を眺めよう。」それ

は考へてせれば、激しい音響とは裏腹な幼いロマンティシズムにすきなかつた。

あたりに生氣がよみがえつて、垂れ下つた草の葉先に宿つた無数

の露が、キラ／＼と宝石のように光った。刻々と色づいていくあたりの光景と、まだ朝もやの下に暗く沈んでいる横尾谷のたゞまいとの対比を、僕は感る種の感動をもつて眺めていた。

雲竜溪谷

年周義輝



(38.2.17)

浅草より東武電鉄の山岳旅行を利用し、日元駅に着いたのが午前二時三十分。それよりすぐ歩き始めて、夜がすっかり明ける頃には渋谷入口のト屋で朝食をすませ、早速アイゼンをがっくいわせて谷に下る。けつこう人が入つていて、反知らずあたりでは谷通しに行こうと思えば順を得たねはならぬ程である。これではラナがあかぬと、右岸についている坂道を行き、早々に脇内の滝入口に着く。坂道より谷を見下すと、水のうじでいるのは「反知らず」の面下の部屋だけで、あとはそうばんとしない。しかし、これより丘岸前方に、この渋谷の盟主、電竜湯

がどうだと言わんばかりに、氷の胸を張っているのが見える。
さて、大岩より左岸を拖いて胎内の滝へ行くのと、直接合流に行くものがあつて、皆んな後者の方をとつてゐる。この方がちよつとした木梁を登る所もあつて、面白そうなので我々もこれを見ることにした。所が辻さんがどうしたはずみかスリップしてそのまま水の中に落ち込んでしまい、着替えをしている同三人、胎内の滝まで行って写真をとつたりとられたり。ちまつと上流の方へも登つてみたが、大したことなうなもので引返す。

の露が、キラ／＼と宝石のように光った。刻々と色づいていくあたりの元素と、まだ朝もやの下に暗く沈んでいる横尾谷のたゞまいとの対比を、僕は感る種の感動をもつて眺めていた。

かつ、僕等は左手カンテ側にルートをとつたのだ。お夕いの存在を認の合ひながら、僕等の悪地はもう助けを求めるよりはしづかって、「一・二の三して思ひ切り呼込んで、スタイルをハンマーで切斷する。その僅か二〇赤ばかりの毛羽立つた八月のナイロンスタイルに僕等は今後の一切を托すのだ。

下降準備を終つて、テラスから急な足元を見下した時、僕はいつ

「やがて、日暮いを感じた。そこを
昨日、巨大な落石が炸裂しながら落つていったのだ。
「サイルをタスクにして、一万を
固定し、一万を確保して牧野が先行する。その彼の姿がテラスから
消えて、細いサイルが震えながら延び切った時、僕は思わず目をつぶつて叫んだ。
「オイ、完全にスリップアするよ。」

結果は勿論わからなかつた。それが一つの筋であり、それもいは赤裸々は自分との斗いたつた。

結果、このまゝ立つても面白くはないし、日が昇るにつれ木柱等が焚ちて来て危険だということで下山をとる。十二時、帰りも同じ坂道を行く。アイゼンは早川谷入口まで未だ外す。走る途中冷たい水に足を突込んで苦労した徒渉吳王よく見るとやんと橋がかゝっている。全然馬鹿な話である。

会 務 報 告

▷ 40年度浦和矢板山岳会総会決定事項 ▷

◇ 40年度役員人手

会長 宮野達也・会計 反野登雄・庶務 岩田英連・公報係 辻勝四郎・
役員係 山崎昌彦・遭難対策委員 山崎弘一・斎藤良則・
市岳連盟事 山崎昌彦、龜江貢之・

◇ 会則改正 —— 第8章として「休会および会員制度」を新設した。

◇ 40年度年間山行計画(前半)

5月2日～5日 ④ 奥沿三山水荒川 ⑤ 白毛門 → 天源下山(新人訓練)

5月30日 西丹沢中川川(春沢、猪俣屋沢、その他) —企画 反野

6月13日 市岳連登高祭(担当、浦和西岳反会、場所未定) 係山崎、斎藤

7月 4日 谷川岳南面放射状

8月 夏山合宿 A 7月25日～8月7日の間 北アルプス尾根BC

B 8月下旬3日間 南アルプス岳周辺の沢 尾白川本谷等

店の各山合宿は、北アルプス尾根一五巻岳～唐松岳 以降定

◇ 新入会員 —— 山崎定治、石川慶朗、塙田国広、周藤武夫

▷ 40年度浦和市山岳連盟総会決定事項 ▷

◇ 役員人手 —— 理事長 山崎昌彦(矢板) 副理事長 田中文男(浦和)

副理事長 大野義雄(市役所)

遭難対策委員長 辻勝四郎(矢板)

埼玉岳連理事 山崎昌彦(矢板) 以上前年度より留任

昭和42年度国体準備実行委員会 当会より 山崎昌彦、辻勝四郎、

◇ 40年度市岳連行

6月13日 登高祭(西岳反会) 7月4日 山岳気象講習会医療講習会

11月7日 市民ハイキング(市役所) 2月6日 市岳連合同山行(担当矢板)

▷ 会員消息 ▷

斎藤良則君 39年9月27日浦和市自治会館で重婚の罪を挙げました。

山崎弘一君 39年10月無事男出。

浦和矢板山岳会 主催共同表記 一覧表

品名	形状	数量	備考	品名	形状	数量	備考
夏天幕	4人用	1	ビニロン	ラジウス	丸ケース	2	マナスル
	6人用	1	・	角々	・	1	・
冬天幕	6人用	1	・	コップフェル	大・小	各1	
	4人用	1	・	ナベ	大	2	
ツエルト	2～3人用	2	ナイロン	石油コンロ	大・中	各1	
アイル	12×40	1	・	ランタン	大	3	
	12×40	2	テトロン	ナタ	・	2	
	12×40	2	麻	アイスバイン	・	1	スノーマン
	9×30	1	・	表記貸出は申込順とする。但し会山行は優先する。使用後は手入れの上一週以内に返納のこと。			
	9×30	1	アイロン				
ハンマー		4					

浦和深谷山岳会 会則

- オ 1 章 名称および所在地
オ 1 節 本会は浦和深谷山岳会と称し、事務所を浦和市内におく。
- オ 2 章 会員
オ 2 節 本会は第 21 条により認められた者をもつて会員とする。
- オ 3 章 目的および事業
オ 3 節 本会の目的および事業は次のとおりである。
1. 会員相互の親睦 2. 登山技術および山に関する研究
3. 技術誌および図録出版物の発行 4. 運動予防および対策
5. その他本会の目的達成に必要な事業
- オ 4 章 役員
オ 4 節 本会に次の役員をおく。並むは総会で行う。
会長 1名、会計 1名、庶務 1名、会報係 1名、長副係 1名、
運輸対策委員 2名、
会長は会を代表し、会務を統理する。
- オ 5 節 会計は会の会計事務に当る。
- オ 6 節 庶務は会の庶務記録に当る。
- オ 7 節 会報係は会報の発行に当る。
- オ 8 節 長副係は会の共同器具の購入保管に当る。
- オ 9 節 運輸対策委員は会の運輸予防および対策に当る。
- オ 10 節 役員の任期は 1 年とし、連続を妨げない。
- オ 5 章 会議
オ 11 節 本会の会議は総会、役員会、山詣会とする。
- オ 12 節 総会は年 1 回これを開く。但し、会員の要請があるときは通常これによくことができる。
- オ 13 節 役員会は必要あるとき隨時これを開く。
- オ 14 節 山詣会は原則として月 1 回以上これを開く。
- オ 15 節 会議は会員の過半数をもつて成立し、での議事は出席正会員の過半数をもつて定める。
- オ 6 章 会計
オ 16 節 本会の正費は会員の納入する会費および他の収入をもつてこれに当てる。
- オ 17 節 会費は月額 150 円とする。入会金は 200 円とする。
- オ 18 節 会計年度は 4 月 1 日に始まり翌年 3 月 31 日までとする。
- オ 7 章 入会および退会
オ 19 節 本会への入会および退会は附定の手続きを経るものとする。
- オ 20 節 入会後最低 6 ヶ月間は準会員とし、役員会の審査の上正会員と認める。
- オ 21 節 次の項目の一項に該当する者は、役員会の協議の上除名し、会長はこれを全会員に報告する。
1. 本会の目的に反する行為のあった者
2. 会費を滞納で 6 ヶ月以上滞納の者
3. 山詣会に 4 回以上連續欠席した者
4. 年間の会山行への参加が 2 回未満の者
- オ 8 章 休会および会員
オ 22 節 本会にて休会制度を設ける。休会とは持休会に限らずあり、やむを得ぬ事情により一定期間通常の会活動への参加および会員納入の義務

後記



どううが、香くない。といふ意味をホクはどう解してい、のかわからない。子供っぽい、熟していほいーと言つたたら、そこには反面、未知数、可燃性がある

ということにモア。

大した龄でもないのに、妙に老成したり、殻の中にもぐり込へたりするには、ホクには未だ夷平だ。

◇

「ひうわけでスカの、疾疫

（毎度、書会々報の御惠贈あつて御礼申し上げます。

今後ともよろしく御指導下さい

浦和深根山岳会代表 管野達也

各山岳会

Y山岳会の困難か、かつて市岳連の整備対策を促進させたように、会の運営の取り組みにも実績がある。たかでの後向もなく、会どやめていつた若い仲間がいる。奇妙なロケックだが、考えてみると、最近の山には登山を喰いものにする輩と同様に、小市民的な登山者も少なくない。

「近頃は、岩登りなんかやつてゐるのが、青くなく、てね。」——これは、かつて相当の岩登りをこなしていた同僚の言葉である。まだ岩登りにうつをぬかしているホクをくさして、人生にはもつとやらなければならぬ大事なことがある。とでも言つたかったの

「最近は、山登りなんかやつてやつているのが、小市民的な気が底しまして……」と、言つて名をやめていつた若い仲間がいる。奇妙なロケックだが、考えてみると、最近の山には登山を喰いものにする輩と同様に、小市民的な登山者も少なくない。

「近頃は、岩登りなんかやつてゐるのが、青くなく、てね。」——これは、かつて相当の岩登りをこなしていた同僚の言葉である。まだ岩登りにうつをぬかしているホクをくさして、人生にはもつとやらなければならぬ大事なことがある。とでも言つたかったの

コンティニアスがコンテであつたり、バットレスを相も及らず大

きな壁と見立て、せたり、誤字やのち見得である。一月おくれ宛字もさうはらと、物を書くとはの推移というのがあるが、こちらは心ならずも一年おくれ。古い便

紙から収録して、そのうち何とか送りつづけた。（勝）

きは壁と見立て、せたり、誤字やのち見得である。一月おくれ宛字もさうはらと、物を書くとはの推移というのがあるが、こちらは心ならずも一年おくれ。古い便

紙から収録して、そのうち何とか送りつづけた。（勝）

浅根 オ一五号

発行日 昭和四十年五月一日

発行所

浦和深根山岳会

（浦和市免家一、五四六、山野道旁方）

編集・審査
辻 勝四郎